

ニコライ・エヴゲーニエヴィチ・オンチュコフ
——ある「辺境の民俗学」——

坂内徳明

目次

I はじめに

II オンチュコフの生涯

- 1、民俗学者の誕生 2、北ロシアへ 3、故郷への帰還 4、シベリア流浪 5、レニングラード時代 6、晩年
III オンチュコフの仕事とその意味

- 1、その仕事の全体像 2、「三部作」 3、その問題意識と現代的意義
IV おわりに

I はじめに

ニコライ・エヴゲーニエヴィチ・オンチュコフ（一八七二—一九四二年）と云えば、今世紀初頭からロシア革命

期を経て一九三〇年代半ばにいたるまで地味ながらも着実な研究活動を行い、この激動の時期のロシア・ソビエト民俗学を担ったすぐれた研究者のひとりとして知られている。この点に関してはほぼ評価は一定しており、とりわけ後述するように、彼の資料収集と研究の成果として今世紀初頭に公刊された「三部作」〔6・11・15——数字は本論文の最後にあげた参考文献の番号を示し、漢数字はページ数を示す。以下同じ〕がロシア・ソビエト民俗学の中で現在もなお持ち続けている絶大な意義に対してはほとんど疑いの余地がないと言っても過言ではない。

しかしながら、おそらくは、今もって多くの謎につつまれている彼の「悲劇的な」〔41三四〕最期が大きな原因となつてであろうが、民俗学者としてのオンチュコフに対してはこれまでまったく不当な評価しか与えられてこなかった。現在まで彼の著作目録が作成されていないばかりではない。彼の生涯と仕事の全体像についてもごく簡単な紹介しか行なわれてこなかったのである。ロシア・ソビエト民俗学に関するすぐれた書誌である『ロシア・フォークロア文献索引』（ソ連邦科学アカデミー付属ロシア文学研究所編、現在までのところ一九〇一—一九七五年の分が全五部六冊として刊行）によれば、オンチュコフの生涯と彼の研究について論じた文献点数は、一九一七—一九四四年に三点、一九四五—一九五九年に同じく三点、一九六〇—一九六五年に一点、一九六六—一九七五年には二点を数えるのみである〔79・80・81・82〕。このうちの二点は『ソビエト大百科事典』（第一版）〔33〕と『文学小百科事典』〔39〕といった事典の中の項目であり、全体としてはオンチュコフとその仕事に関するモノグラフはまったく見出すことができないと言える。もっとも、この書誌『ロシア・フォークロア』のあげたオンチュコフ関連文献は一九七五年までに限定したとしても完全ではなく、その不備は補われなくてはなるまい（例えば〔32₁〕）。さらには、民俗（族）学以外の領域を扱ったオンチュコフの仕事も数点を見出すことができるので〔2・7・8・9〕、これによつてもオンチュコフ著作目録は補われる必要がある。また、ロシア民俗学・民族学史に関するすぐれた概説として知

られているM・K・アザドーフスキイ、C・A・トールカレフ、また、シベリアにおけるロシア民俗学を概観したP・P・コーシェレフらのモノグラフ〔43・90・57〕、ないしは昔話や口承叙事詩^{フイリナ}など口承文芸の個別ジャンルに関する研究史の叙述（例えば〔70・44〕など）に見出すことのできるオンチュコフに対する言及についても考慮しなければならぬであろう。そうした言及もオンチュコフに対するこれまでの評価を示す材料である。一方、書誌『ロシア・フォークロア』の中の一九〇一—一九一六年を扱った巻には彼について三点のみの文献があげられているにすぎないことは、彼に対する「不当な」評価が革命前からも存在していたことを示しているかもしれない。いずれにせよ、これまでのロシア・ソビエト民俗学研究史の中でオンチュコフという存在は、その研究活動と、数量の上ではさほど多くはないにせよきわめて良質な研究成果に比して、まったく予想外なほどに軽視されてきたのである。

しかしようやく近年にいたって、特に一九六〇年代後半以降⁽²⁾、ソ連の民俗学研究の中でオンチュコフに対する関心の高まりが徐々にではあるが見られるようになった。先に言及した『文学小百科事典』（第五巻、一九六八年）でオンチュコフが項目として取りあげられたこと（本文一七行、執筆者はK・B・チストーフ）はその例である。そして特に注目すべき出来事は、かつて約半世紀以上も昔にオンチュコフが行った民俗学調査の経路をたどることを目的として、モスクワ大学口承文芸講座が一九六五—一九六六年にオネーガ川流域を調査したことである〔84⁽³⁾—84⁽⁴⁾〕。このような関心の高まりの背後には、たんにオンチュコフ個人と彼の仕事そのものに対する見直しがあるだけではない。すなわち、一九世紀末ないし今世紀初頭以後、ロシア革命期と一九二〇、三〇年代へと展開されていたロシア・ソビエト民俗（族）学研究の全貌の解明、そして特に、この時期に活躍したソビエト民俗（族）学研究者の「第一世代」の生涯と仕事、理論的模索に対する見直しというより大きなコンテキストの中で〔97⁽⁵⁾—97⁽⁶⁾〕オンチュコフ再評価の動きも考えられるはずである。

こうした動向の中で、T・Γ・イヴァーノヴァ（現在ソ連邦科学アカデミー・ロシア文学研究所研究員）によって書かれた「H・E・オンチュコフと彼の学問的遺産の運命」（40）と題するモノグラフは、今後のオンチュコフ研究にひとつの基本的なバースペクティブを切り開いたものとして高く評価される。雑誌「ロシア文学」（一九八二年第四号）に発表されたこの論文は多くのアルヒーフ文献も含むオンチュコフ関連文献を余すところなく渉猟した周到な作業の成果であり、オンチュコフの全体像を描いた文字通り最初のモノグラフとなっている。また、このイヴァーノヴァ女史の論文執筆とほぼ期を同じくして、A・Л・ナレーピン（現在ソ連邦科学アカデミー・世界文学研究所研究員）によってやはりオンチュコフの生涯と仕事に関する論文が書かれたが、現在までのところ刊行されていない⁽³⁾。

本稿は、主としてこのイヴァーノヴァ女史の論文に依拠しながらオンチュコフの生涯のアウトラインをたどり、同時に彼の生きた時代の民俗学の動静とつきあわせることを目的とする。さらにもう一方では、オンチュコフの業績の中でも中心的な仕事を取りあげて、その民俗学史上の意義と、特にその仕事に見られる彼の鋭利で明敏な問題設定と問題意識について述べるのが本稿のねらいである。おそらくは、本国ソ連においては今後の研究の進展によって、これまで不思議なほどに軽視されてきたオンチュコフの仕事の意味、そして彼の生涯の不明な部分につき多くの論考と事実の解明がなされることと思われるし、そうなくてはならないだろう。本国のそうした成果を待たずに、あえて彼の事蹟の一端を紹介するという本稿の試みがオンチュコフ再考にとっていささかなりとも力になることができる⁽⁴⁾。

II オンチュコフの生涯

本章ではオンチュコフの生涯と主要な研究・調査活動、成果について概観する。その際、彼の研究活動とそれが行なわれた場所の変遷に対応させていくつかの時期に区分して述べることにする。すなわち、1、誕生から一九〇〇年の調査旅行を終えるまで、2、一九〇一年から郷里サラールへ戻る一九〇八年まで、3、一九一七年までのサラール時代、4、一九一七年から一九二四年まで、5、一九二四年末から一九二〇年代末のレニングラード時代、そして、6、晩年として一九二〇年代末以後一九四二年の死去まで、がそれである。

1、民俗学者の誕生

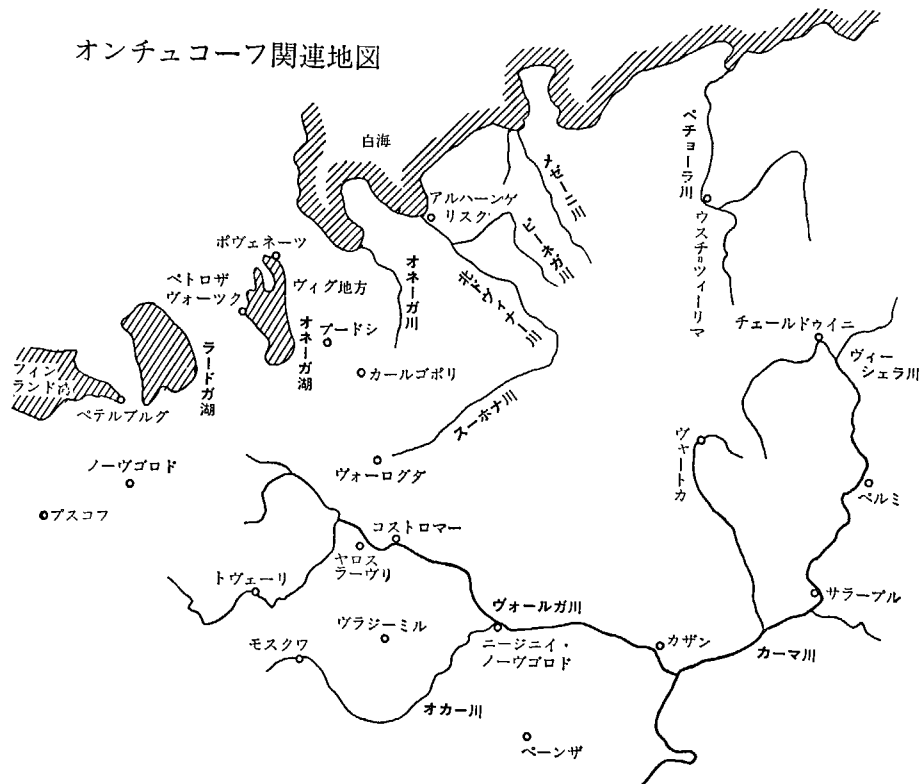
ニコライ・エヴゲーニエヴィチ・オンチュコフは一八七二年三月にヴァートカ県（現在のキーロフ州）の町サラールで生まれた。誕生日については、三月三日と同五日（ともに旧暦）の二通りの記述があり、そのいずれかを決定する資料はない〔40三七〕。父親のエヴゲーニイ・イヴァーノヴィチは毛皮や外套を扱う商人であり、母親のマリヤ・ヴラジミロヴナも商家の出身だった。彼女はニコライを生むと三ヶ月後に亡くなっている。残された子供はサラールから八〇キロほど北に位置するヴォートキン工場村の祖母のもとで育てられたあと、一八七八年に父親のいるサラールに戻り、七歳の時に教区の学校へ通うこととなる。オンチュコフも、ロシアの多くの作家や民俗研究者などインテリの例にもれず、幼い頃よりフォークロアに対して強い関心を示していた。彼の回想によれば、「私は早くから読書が好きで、もちろん最初は昔話でした。それに聞くことが大好きでした。新しい御者や料理女は私のもとか

ら解放されないことがしばしばでした」〔40三〕。

オンチュコフが生まれたサラープルは、現在のソ連邦の行政区画ではウドムールト自治共和国内にあって、北西約六〇キロの場所に位置するイジューフスクに次ぐ第二の町である。一六世紀末にはじめて文献上に登場、シベリアへの交通路にあたっていたこの町は一七八〇年にサラープル郡の郡都となる。加えてカーマ川に面するという好立地条件はこの町を大きく発展させた。すなわち、シベリアの毛皮や穀物を原材料、あるいは製品としてカーマ川を下ってヴォルガ川へと運びこむことによって、特に一八世紀後半から一九世紀初頭にかけては西シベリアないしシベリアでも重要な商業・運搬の拠点として目ざましい発達をとげたのである。一九世紀末のこの町の人口は約二万人、相変らず毛皮産業や製靴業を中心とする商業の町として機能していた〔75(二七)〕。オンチュコフの両親の出自と職業はこうした商業都市に典型的であったと言える。また、このサラープルを含むカーマ川流域地区、さらにヴォルガ川中流地区は古くからロシア民族と非ロシア・スラヴ民族が複雑に錯綜して混住する地域として民族学的に注目すべき場所だった。現在もおマリーリ、チュヴァーシ、ウドムールト、タタールといった自治共和国が点在するこの地域には、ウドムールト、マリーリ、モルドヴァーといったウラル語族フィングループ、ならびにタタール、チュヴァーシ、バシキールといったアルタイ語族チュルクグループの諸民族が居住しており〔60〕、スラヴと非スラヴ民族の接触・緩衝地帯として大きな文化的機能を持っていたのである。いわばこうした異民族の混住の中にオンチュコフが生まれたことが彼の研究に与えた影響は決して小さくなくかつたはずである。

さらにもう一点、このサラープルに関してイヴァーノヴァ女史が紹介している事実をあげるならば、この町が同じヴァートカ県に属する他の町に比べて「名高い」こととして文盲率の高さがあった。すなわち、一八九七年の全ロシア・センサスの数値によれば、サラープル住民の識字率は県内の最低で、四二パーセントでしかなかったという。こ

オンチュコフ関連地図



のことは推測でしかないが、こうした町の識字率の低さがオンチュコフ自身の口承文芸に対する興味を高める結果をもたらしたとは言えないだろう。

一八九〇年に教区の学校を終えたオンチュコフは、カザンへ出て看護学校に入学、三年後にここを卒業している。その後の数年間を彼はベルミ県内の各地の村で医者の手助として働いた。この頃、特に一八九一―九二年にはロシア各地で大飢饉が発生し、「近代ロシア史上最悪の凶作」〔100云〕がもたらされた。そしてその直後にはコレラやチフスが農村を襲い、多数の死者をもたらすという状況の下で、医者の助手としておそらく忙しい日々を彼は送ることになったであろう。彼は自らもチフスに感染しながらも病気の治療に従事することとなる。その後、彼はベルミ県の県都ベルミへ移り、しばしの間だが、護送囚人用病院で勤務している。このベルミの時代にオンチュコフはこの土地の新聞発行に協力するが、このジャーナリストとしての活動が彼を人文科学研究へと踏み込ませる第一歩となった。

一九世紀の末にオンチュコフはペテルブルグに上京する。帝都ペテルブルグにあって、当時の民俗(族)学研究の一大中心機関としてあまねく認められていたのは帝室ロシア地理学協会内の民族学部門であった。この部門の研究成果はすでに一八六七年に発刊された『民族学部門紀要』によって発表されていたが、一八九〇年からは「民族学専門雑誌への社会的関心の高まり」〔90四〇〕にもとづき「生ける過去」(第一巻編集はB・H・ラマーンスキイ、一九一六年まで刊行)が発行されていた。また、特にこの部門内での昔話研究も一八九六年をひとつの区切りとして〔61二〕活発化していたのであり、オンチュコフらによる『北ロシア昔話集』が民族学部門の『紀要』として発表される基盤が形成されていたと言つてよいだろう。

自由な学問的雰囲気を誇るとはいえ帝室の研究機関としてその權威を国の内外に知らしめていた地理学協会と、そ

れまでまったく研究業績も見当らないシベリア出身の医者の手とがいかにしてコンタクトを持つにいったのか、これはイヴァーノヴァ女史も述べるように、不明のままである。何者かが仲介の役となったのか、あるいは、ホテルブルグ上京後に彼がいくつかの定期刊行物（「祖国の息子」「新時代」等）に小さな論文を発表していることから〔40三七〕それがきっかけとなったのか、等々推測はできるが、この点は今後の事実解明による他はない。いずれにせよ一八九九年以前に、オンチュコフが民俗学上の調査を行ったり、民俗学に関する研究を発表したという事実は見出すことができない。

だが、一九〇〇年の時点でロシア地理学協会とオンチュコフとが深い結びつきを持っていたことは明白である。すなわち、協会の『一九〇〇年度活動報告』（62頁）の中には、ヨーロッパ・ロシア地域を調査した者として植物学者B・A・フェードチェンコの名とともにオンチュコフの名前があげられている。さらには、オンチュコフの調査が民族学的目的によるものであること、調査地域はベルミ県チェルドゥイニ郡で、カマ川支流にあたるヴィーシエラ、コルヴァ両河川流域の村々であること、そして調査の成果が歌謡五八、昔話二八、泣き歌と「言い返し」若干であって、これら収集資料は協会の管理下に置かれること、またこの際の調査記録が雑誌「生ける過去」に発表されるであろうこともこの「年次報告書」の記事は報じている。

この記事の予告どおり、オンチュコフの調査報告はただちに「生ける過去」誌一九〇一年第一冊号に掲載された。「チェルドゥイニ郡をめぐる——ヴィーシエラ、コルヴァ、ベチョーラ川流域への旅」と題された三〇ページ余のこの文章は、注釈や参考文献をあげて一切せずに書かれた日誌風の覚書であり、報告書というよりもむしろ紀行文とも呼びうるものである。文章は六月三日（一九〇〇年）にチェルドゥイニを出立するところから始まり、七月末までのほぼ二ヶ月間にわたってこの地方の農村をまわって得たデータと印象を坦々とした筆緻で記してい

る。中心となったのはヴィーシエラ川に沿っての一ヶ月におよぶ旅であり、オンチュコフはその際に各村で古老たちから聞き取った伝承、村の家畜数など経済状態や農家内の家具・食器・衣裳などの調査によるデータを年代記やロシア人入植の歴史に関する記事も交えて記述するのである〔1〕。こうしたオンチュコフの調査・記述能力が一体どこで習得されたものなのか、そもそも先天的なものであったのか、についてはわからないが、ここにはすでに、後世にまで持続されていく民族誌家としての彼の記述力が十二分に発揮されていると言つてよい。イヴァーノヴァ女史は、このオンチュコフのチェールドゥイニ郡調査につき、「純粹な口承文芸的側面から見ればきわめて取るに足りぬ成果」しかないし、調査紀行も「記述的で、いかなる學問的結論もねらうものではない」と評している。たしかに、採集された口承文芸作品の点数は少ないと言えるだろうが、調査紀行文は彼のすぐれた問題意識と調査能力とを明確に示している点でイヴァーノヴァ女史の叙述は不十分で誤解を招きやすいものである。当時、どの点が評価されたかはまったく不明であるが、このチェールドゥイニ郡の民族学調査とその成果に対し、地理学協会は銀小メダルを授与し、一九〇一年三月一二日付で彼は地理学協会準会員に選出された〔63 XI〕。ここに、民俗（族）学研究者オンチュコフが誕生することになる。

2、北ロシアへ

一九〇〇年夏のチェールドゥイニ郡調査はオンチュコフの行った最初のフィールドワークとして、文字通り彼の運命を方向づけた形となった。この一九〇〇年を第一回とすれば、翌年から一九〇七年までの五回を含めて、彼は計六回の北ロシア地域の民俗調査を行っている。第二回以降の調査地域は次のとおりである。

一九〇一年 ベチョーラ川下流地域

一九〇二年 同第二回

一九〇三年 ポモリーエ地域

一九〇四年 オローネツ県ベトロザヴ、オートク、ブードシ、カールゴポリ、ボヴェネーツの各郡とポモリーエ地域

一九〇七年 アルハーンゲリスク県アルハーンゲリスク、オネーガの各郡

北を意味し、時として特別な響きを込めて発音されることもあるロシア語のセーヴェルは特にヨーロッパロシア北・北西部をさす場合があるが、これはヴォールガ川を南限とし、東はウラル山脈、西限がレニングラード、ノーヴゴロド、ブスコフといった具合で、全体としてかなり広大な地域である。一九世紀の行政区画で言えば、トヴェーリ、ノーヴゴロド、オローネツ、ヴォーログダ、アルハーンゲリスク、ヤロスラーヴリといった県を含んでいた。この北ロシアは、一三—一五世紀の二世紀に及ぶモンゴルの侵入と支配を受けることがなく、また、一七—一九世紀に中央ロシアで見られた農奴制・地主土地所有制度があまり見られず、一八、九世紀にはロシア帝国内での後進地域となっていた。こうした北ロシアの孤立と隔絶は、逆にこの地域に中世ロシア以来の伝統文化と民衆創造を残存し、発展させる原動力となったのである。そのことは、木造建築や衣裳、民具をはじめとした物質文化の各作品、ならびに民謡、昔話、ブイリーナなどの口承文芸作品や神話的觀念体系といった精神文化のすべての中で確認できるが〔91・92〕、特に口承文芸について言えば、北ロシアは一九世紀半ばのП・H・ルイブニコフによるブイリーナ「発見」以降、A・Ф・ギリフェルジーン、E・B・パールソフ等々多くの収集家たちによって繰り返し資料収集が行われてきたのであった。民衆文化の「宝庫」としての北ロシアは一九世紀以来、つねにロシア民俗の発見の場所として機能して

きたし、現在もなおその意義を失っていないとも言える。しかもこのような現代にまで受け継がれている北ロシアに向けての強い志向が、たんなるノスタルジーとしての「民衆回帰」ではないことは忘れてはならない。ここで詳述することは控えるが、北ロシア地方に対する一九世紀後半に展開されたフォークロア資料収集のための調査は、ある点ではナロードニキ運動と軌を一にするものであり、放浪する収集家Ⅱインテリゲンツィヤが自らのアイデンティティを求めて民衆文化を探訪していくことは、「残滓としてのフォークロア」発掘ではなくて「現在文化としてのフォークロア」創造と結びついていたはずであった。

ところで、オンチュコフが北ロシアの各地を精力的に歩きまわった今世紀初頭においても、北ロシアは民衆的伝統文化の宝庫として数多くの収集家たちを受け入れていた。若干の例をあげておこう。

И・Я・ピリーピンは雑誌「芸術の世界」のメンバーのひとりとして、特に昔話やブイリーナへの挿絵や装飾的な画風で知られる画家・舞台芸術家であるが、彼にとっても北ロシアへの旅行は長い間の夢だった。この待望の北ロシア行きが実現したのは、オンチュコフが二回目のペチョーラ川地域の調査を行った一九〇二年夏のことである。行先はヴォログダだった。さらにピリーピンは、翌一九〇三年にロシア博物館からの依頼を受けた形でヴォログダ県内の三郡とアルハーンゲリスク県のシェーリンクルスク郡を回り、民族工芸を採集し、木造建築の写真撮影を行っている。さらに一九〇四年には一月にトヴェーリ県、夏にオローネツ県を、やはりこれもロシア博物館の調査要請にもとづいて巡っている〔49三元〕。むろん、北ロシアといっても広大であり、オンチュコフの調査地域と重なり合うわけではないが、奇しくもほぼ同時期にこの二人が北ロシアを歩き回っているのは興味深い。ピリーピンがこの北ロシア旅行の直後から画家として活発な仕事を展開する中で、北ロシアの民衆芸術が彼の作品に大きな影響を与えていたことを見る時、二〇世紀初頭においても北ロシアという地域が持ち続けていた魅力の大きさに驚かざるをえない。ま

た、このビリーピンを調査協力者としていたロシア博物館の民族学部門にはE・A・リャーツキイがおり、彼もまた、一九〇二、一九〇三、一九〇四年に北ロシアの民族学資料収集を活発に展開していた。彼の活動については別に拙稿で記したので「96」、ここでは述べない。

ビリーピンとはほぼ同時代の画家としてその特異な画風で知られるH・K・レーリヒもまた、北ロシアを旅行してひとつの感動を経験した人物である。すなわち彼は一九〇〇年にネヴァー川、ラードガ湖、ヴォールホフ川、ノーヴゴロドをまわった（その時の印象記である「ヴァリャーグ人からギリシヤ人への道に沿って」〔一九〇〇〕〔74〕）には中世ロシア芸術と自然に対する個性的な関心がすでに見られる）ほか、一九〇三年とその翌年には「ロシア美術の再発見の旅」〔94〕凸として四〇余の都市をたずねる中で北ロシアにも足をのばしているのである。レーリヒの芸術にとっては北ロシアのみが圧倒的な影響をもたらしたとは言えまいが、特に彼の初期の作品（美術アカデミー卒業作品の「急使」〔一八九七〕や「海のかなたよりの客」〔一九〇一〕など）に見られる「民族性」はそうした彼の北ロシア「体験」と無縁でなかったはずである。

さらに、オンチュコフと個人的関わりのあった作家M・M・ブリーシヴィン⁽⁶⁾の場合は北ロシアに対する情熱を物語る興味深い例であろう。一九〇六年、ペテルブルグに住み作家活動を開始しようとしていたブリーシヴィンは、近くに住んでいたこと（ともにペテルブルグ市内東部のマラーヤ・オーフタに居住していた）がおそらくはきっかけとなって親交を結んだ。この二人の共通点（ほぼ同年でオンチュコフが一歳上、ともに孤児同然、幼い頃から分離派教徒に接していた環境など）と当時の精神状態や置かれた社会的状況の相違については、イヴァーノヴァ女史による「M・M・ブリーシヴィンとH・E・オンチュコフ」〔41〕に詳しい。すでに数回の北ロシア調査を行っていた民俗学者オンチュコフが、「どこかへ旅をしたい」と願っていたブリーシヴィンに北ロシア行きを勧めたのは当然であ

ろう。ブリーシヴィンは、のちに一九二六年に書いた自伝的小説「幸福への探求」の中で次のように記している。「幸運なことに、私の住むキノヴィーイスキイ通りのこのキャベツ畑（マールヤ・オーフタ周辺のこと——引用者）にいて、人生の道を始めていたのが、昔は田舎の医師補で今は著名な民族学者となったH・E・オンチュコフでした。私が子供時代からどこかアジアの地を訪れることが夢だったと打明けると、彼はアルハンゲリスク県のヴィグ湖が私の夢にぴったり合っているから、ぜひともそこへ行く必要があるといって私を説得したのです。彼は私をアカデミー会員のシャーフマトフに紹介し、シャーフマトフがあれこれと私に教えてくれて科学アカデミーからは私のために許可を手に入れてくれました。その時からというもの、私は民族学を研究しておらず、自分のやったことが学問かどうか強く確信できないにもかかわらず、これまでの生涯の間ずっと私には民族学者という呼び名がつきまといて離れないのです」〔72—四—五〕。

オンチュコフの助言を受け入れたブリーシヴィンはただちに、すなわち一九〇六年六月にペテルブルグを出発し、ペトロザヴォーツクからボヴェエネーツを経由してヴィグ湖へ向かった。そこではカレーリヤ島に一ヶ月以上もどまって近隣の村々を訪問している。この時の調査の成果としては一九〇七年四月のロシア地理学協会民族学部門で「ヴィグ地方で得られた民族学的視察」と題する報告〔65三〕が行われたほか、後述するオンチュコフ編『北ロシア昔話集』へ収録された三〇余の昔話採集、そして、彼自らが「作家としての誕生」と呼ぶ作品『鳥も驚かぬ地にて』（一九〇七）が執筆されるのである。しかも注目すべきなのは、イヴァーノヴァ女史が丹念な対照作業によって明らかにしたように、『鳥も驚かぬ地にて』その他、この時代のブリーシヴィンの作品の中にオンチュコフの『昔話集』その他の著作からの多くの借用が見出されるのである〔41三三〕。

さらにブリーシヴィンは、ヴィグ地方の調査の翌年一九〇七年五月にやはり北ロシアのスーホナ、北ドヴィナー川

流域とアルハーンゲリスク、さらには白海沿岸とラップランドをまわっている。この時の昔話収集はヴァシーリイ老人からの五篇のみであるが（これもオンチュコフ『北ロシア昔話集』に収められた）、前回同様、地理学協会にて「ロシア極北地方のボモリーエ人」と題する報告を行っている（「66頁」）。こうしたブリーシヴィンの調査活動はさらに、一九〇八年の奥ヴォルガ地方、一九一〇年のオカー川、一九一三年のクリミヤ地方といった具合に展開されていき、一九一〇年には民族（俗）学研究者としての業績が認められた形で、地理学協会正会員に選出されている（「67頁」）。むろん、この一九一〇年代までの彼の関心が民俗（族）学そのものに向かっていったと断言することはできない。この時期の旅行の中で生み出されつつあったブリーシヴィンの初期作品は、北ロシアその他の地方の民衆生活とフォークロアの記述に多くのスペースをあてているとはいえ、やはり作家としての彼の姿を色濃く投影しているのである。しかし、このことは学問から芸術へ、ないしは民族学から文学へといった変化としてではなくて、むしろすでにこの当時の彼の作品が「民衆の歴史的運命というテーマを独自な形で解明する哲学的散文への志向」（「48頁」）を持っていたととらえられるべきと思われる。そしてこうしたブリーシヴィンの生涯を通じて一貫していた民衆と自然に対する透徹した観察力を生み出す基盤となったのが北ロシアという地域であったといえるのではないだろうか。

オンチュコフの調査にもどろう。彼の第二、第三回目の調査は一九〇一年と翌年に、ベチョーラ川下流地域のウスチツィーリマ郷とプストジョールスク郷について行われた。特にこの二度の調査の目的はこの地域の叙事詩伝統すなわちブリーナ採集にあった。一九〇一年夏の収集では、語り手の多くが漁獵や刈入れに出ているために全部でわずか七つのブリーナのテキスト、その他に婚礼歌、ブリーナの断片等を採録できたにすぎなかった。この成果は一九〇二年の『帝室アカデミーロシア語・ロシア文学部門報知』第七卷三冊に「ベチョーラのブリーナ」と題して発表され、また、同年に単行本として出版された（「3」）。調査翌年の春に、地理学協会から再度資料収集の要請

を受けた彼は、前回の失敗を教訓として調査時期に配慮する。すなわち、一般に北ロシア地方では、春の復活祭から六月末の使徒ペテロの日あたりまでが農民が比較的自由な時間を持つことができるのを考慮し、さらに特にベチヨール川地域では復活祭の時期から川の解氷までがそれにあたるのに気づいた彼は、四月と五月を調査時期に選んでいる。この選択は成功し、今回は計三八名の語り手から百近いブリーナ、そして各種歌謡などを書き取ることができたのである。この時の調査としては、巡礼歌や子守歌、儀礼歌などのテキスト二八篇を収めた「ベチヨールの詩と歌」〔10〕のほか、ブリーナの収集と語り手ないしブリーナの特徴などについての論文「ベチヨールにおけるブリーナ詩」〔4〕が書かれた。また、採録されたテキストはごく一部が「ベチヨールにおける新たに採集されたブリーナ」〔5〕として発表、さらに前年の採集成果もあわせた形で『ベチヨールのブリーナ集』として一九〇四年に公刊された〔6〕。帝室ロシア地理学協会の『民族学部門紀要』第三〇巻の全部がそれにあてられており、全体は四二四ページのブリーナのテキスト本文ならびに方言語彙集、索引、そして四五ページにわたるオンチュコフの序論から構成されている。語り手は計二五名、テキストの数は一〇一篇である。この資料集の刊行に対して、地理学協会は金小メダルを与えている。この資料集の具体的内容とその意義、問題点などについては後述するが、「テキスト学の視点からすれば」同時代のブリーナ資料集（例えばA・D・グリゴリエフ、A・B・マールコフによる）に比較して見劣りのするものであった。イヴァーノヴァ女史によれば、これはオンチュコフが文献学的訓練を受けておらず、テキスト学の知識を持ち合わせていなかったことによるものだというが〔40三六〕、おそらくはそのためであるうか、オンチュコフは一九〇一年にベテルブルグ考古学専門学校へ入学している。これは一八七七年にH・B・カラチョーフ（一八一八—一八八五、アカデミー会員でロシア史家、法律研究やアルヒーフ研究でも知られた）によって創立されたもので、入学者はすでに高等教育を受けた者で二年教育である。考古学だけではなく、古文書学、民

族学、古字・古銭学を習得できる機関だった。一九〇三年までの間、彼はここの聴講生となっていた。

バイリーナに続いてオンチュコフが着手したのは、北ロシア地方の昔話採録の仕事である。すでに一九〇一—二二年のベチョーラ川流域での調査において、彼はバイリーナ以外にも土地の教会に收藏されている古文書や手稿資料の探索・解説を行ったほか、昔話も採録していた。一九〇三年と一九〇四年に行なわれたオンチュコフの第四、第五回目（チュールドゥイニ郡の調査から数えて）の調査の最大の目的は昔話の収集であった。そしてこの目的は『北ロシア昔話集』として実現され、後世、そして現代にまでこの資料集は価値あるものとしてたびたび言及され、引用されている。もっとも、この『昔話集』がオンチュコフのみの業績でないことは後述することになるが。

この一九〇三、一九〇四年の調査地域は、すでに述べたとおり、アルハンゲリスク県のボモリーエ地方とオローネツ県のベトロザヴォーツク郡、ブードシ郡、カールゴポリ郡、ボヴェネーツ郡の村々であった。この地域は北ロシアの中でも特に宗教的異端派、とりわけ無僧派グループの中心的存在である「ボモリーエ派」が多いことで知られていたが、オンチュコフも一九〇四年には、この異端派の中心であるヴィグ地方を訪れている。すなわち彼は、帝室科学アカデミーをはじめとして地理学協会、ロシア博物館などの要請を受けてヴィグ湖上の島の村を含む異端派の村を歩きまわって、彼らの聖像画や手稿を調査したのである。この際の調査の成果としては帝室科学アカデミーのロシア語・ロシア文学部門での口頭発表のほか、「遺物と古儀式派」と題する論文（8）が記されている。

こうした異端派に関する資料収集と並行して多くの精力が昔話を含む多種多様な散文的伝承の収集に注がれた。オンチュコフ自身が記しているところに従うならば、ボモリーエとオローネツ県における昔話採録は「偶然的な性格」を持つものであり、その成果の中には昔話というジャンル分類ではとうてい収まりえない雑多な種類のフォークロアが混在していると言える。しかしながら、この成果は予想外の形で発表され、しかも予想を越えた評価を受ける

ことになるのである。すなわち、オンチュコフの手で集められた昔話を出版するに際して、のちに言語学者として知られるA・A・シャーフマトフが一八八四年にオローネツ県で採録した七一話、また、のちに作家として活躍することになるM・M・ブリーシヴィンが、既述のごとくオンチュコフの勧めに従って一九〇六年にやはりオローネツ県ヴィグ地方で聞き取った三七話、その他に地理学協会内にアルヒーフとして収められていた約三〇篇を加えて、全体で三〇三話（ただし実際は三一〇）を含む大部の資料集となったのである。『北ロシア昔話集』というタイトルを持つこの資料集〔11〕は、前回の『ベチョーラのブイリーナ集』同様、地理学協会の『民族学部門紀要』（第三巻）として一九〇八年に公刊され、同年、アカデミー会員C・Φ・オリデンブルグの推挙によって地理学協会の金大メダルを獲得することになった〔66支〕。

この『北ロシア昔話集』そのものについても次章で述べることにしたい。ただ、その意義について一点だけ指摘しておくならば、北ロシアは既述のごとく口承文芸の宝庫としてすでにブイリーナ、民謡、泣き歌などの採集で知られていたにもかかわらず、昔話についての本格的な収集は行われておらず、文字通りこのオンチュコフの収集・編集による『北ロシア昔話集』が最初の試みであったのである。もうひとつ、この昔話集にまつわる名高いエピソードを紹介しておく。それは、B・M・ボンチリブルエーヴィチによって書かれた「口承民衆創造に関するB・M・レーニン」と題された回想記の中の一節である。一九一八年三月にソビエト政府がペトログラードからモスクワへ移った時、クレムリンの中に小さな図書館を作ることになった。そこに収める本としてレーニンが要求したものの中には、民衆の言葉や諺、言い回しに満ちあふれたB・M・ダーリの『生きた大ロシア語辞典』も含まれていたが、ボンチリブルエーヴィチが民謡や昔話、ブイリーナなど口承文芸作品を収めた書籍を持っていると語ると、ただちにレーニンはそれを見たいと言った。最初は自分の荷がペトログラードから到着したばかりでほどいていなかったたので、作家のデミ

ヤン・ベードヌイからレーニンの興味をひきそうなフォークロアに関する本を借りた。その後すぐに荷が着いたのでそれをレーニンのもとへ持って行くと、彼は素早くそれらの本をタイトルでジャンル別に分類をした。第一に彼の目をひきつけたのは、E・B・バルソフ編『北ロシア地方の泣き歌集』であった。次にレーニンが注目し、その晩に読んでいたのがB・H・ドブロヴォーリスキイ編『スモレーンスク民族学資料集』である。翌朝、ブルエーヴィチがレーニンのもとへ行くと、彼は次のように語ったという。「なんて興味深い資料なんだろう。私はここにある本を全部、ざっと目を通してみたよ。そして気づいたんだが、明らかにこれらをすべて普遍化して、社会的・政治的視点から見つめ直すには力も欲求も足りないんだ。だって、この資料にもとづいて民衆の絶望と希望についての研究を書きあげられるはずなのだから。ごらんよ！ ほら、私がページをざっとくってみたオンチュコフの昔話集の中には、素晴らしく注目すべき個所があるんだ。まさにこれこそがわれら現代の文学史家が目を向けるべきものだ。これは本物の民衆創造であって、現代の民衆心理を研究するためにはとても必要で大事なもののなんだ」〔45 語訳—吾〕。

オンチュコフの業績リストから見て、ここで言及されている「昔話集」が『北ロシア昔話集』であることに疑いの余地はない。レーニンとブルエーヴィチの会話はここで終っているため、レーニンがこの資料集のどこに興味を持ったかについてより詳しく知ることはできない。だが、このエピソードはオンチュコフの手になるこの昔話集が革命期前後のインテリゲンツィヤの視野にはいつていたことの証拠となるだろう。

次節で述べるように、一九〇八年、先に記したとおり地理学協会よりメダルを受け、仕事も絶頂期にあった彼は突如としてベテルブルグを去って故郷の町サラールに戻り、民俗学とは縁を切ってしまうことになるのだが、この時点までの彼の北ロシア・フォークロア調査の成果は以後も公刊されていた。まず第一にあげなくてはならないのは、『ペチョーラのプリリーナ集』『北ロシア昔話集』とならんで彼の三大業績のひとつとなった『北ロシア民衆劇集』（一

九一一年）である〔15〕。これは一九〇五年から一九〇七年にかけてアルハーンゲリスク県のアンハーンゲリスク郡とオネーガ郡、オローネツ県のボヴェネツ郡において採録された一〇の芝居を収めている。その一部は最初、一九〇九年に「北ロシアにおける民衆劇」と題された研究論文〔14〕の末尾に発表されたが、のちにそれを校訂して一九一一年に単行本の形で公刊されたものである。一五〇ページ足らずの資料集だが、『北ロシア民衆劇集』は北ロシアのみならずロシア全域における民衆劇テキストの最初の本格的公刊として大きな意義を持つものと言つてよい。

このほか、一九〇八年以前に彼が行つた北ロシア調査で得られた口承文芸作品としては、歴史歌謡、巡礼歌、婚礼歌、見合いの時の婚礼話などがあり、それらはオンチュコフによって書かれた比較的小さな論文の中に見出すことができる〔10・12・13〕。さらにオンチュコフは方言学や古文書収集にも興味を示し、特に後者は北ロシアにおける古儀式派に対する関心とも結びついていくつかの研究論文として具体化されている〔7・8・9〕。この宗教的異端派に対する強い民族誌的関心については後にふれるつもりである。このほか、一九〇四年にロシア博物館民族学部門に対して民芸品一〇五点を提供するなど、オンチュコフの調査の背後にあった民衆生活・民俗に対する関心はきわめて大きく、幅広く多面的であつたのである。

オンチュコフが編集した『北ロシア昔話集』が出版され、ただちに地理学協会の高い評価を受けた一九〇八年に彼は三六歳であり、すでに数度の調査旅行も経験し、研究活動も順調だった。業績も十二分に認められていた。彼にとってそれは、生涯を通じて最も大きな充実感を味わっていた時期であつたかもしれない。

3、故郷への帰還

一九〇八年にオンチュコフは郷里サラールに戻り、新たな人生の道を進むことになった。ここで彼はサラール

ルの市議会議員に選ばれている。首都ペテルブルグと北ロシア農村との往復の中で成功裡に展開していたかに思われる民俗学研究を、彼自らの意志で打ち切った理由は一体どこにあったのだろうか。イヴァーノヴァ女史は、一九〇五年革命とそれによってもたらされた社会的変化、インテリゲンツィヤの動揺の中でオンチュコフが「故郷に対する社会的奉仕の場で自分の力を捧げる決意をした」と述べている〔40三〕。しかし、この点については根拠となる資料があがっていないので、そのとおりかどうかは不明である。

サラープルに戻ったオンチュコフが多大の精力を費したのは、ペテルブルグへ上京する以前にも携わったことのあるジャーナリズムでの活動だった。一九〇九年三月一日から彼は日刊の社会・政治、文学新聞「カーマ川地方の生活」の出版・編集に打ち込むこととなった。この新聞は、一九一三年に対抗誌の「カーマ」が発行されるまではサラープルでただひとつの新聞で、リベラルでデモクラティックな性格を持っていた。紙上に掲載されたのは、閉鎖の恐れのあるヴォートキン工場の件や防波堤工事、鉄道敷設や一九一四年の大洪水のことなど市民生活にとって重大なことのほか、文化情報も多く見られた。グリボエドフ、プーシキン、ゴーゴリ、ネクラソフ、そしてチェーホフ、クプリーン、ゴリキイといった同時代人も含む作家たちについての資料も紙面を飾ったが、とりわけ多くのスペースを占めていたのはレフ・トルストイの生涯、道徳的・哲学的見解に関する記事であった。これはおそらく、オンチュコフ自身の立場の反映であり、このことと彼の帰郷は関連があるかもしれない。

オンチュコフの手になる新聞は一九一七年の二月革命発生時までの八年間にわたって発行されたが、この発行は彼に多くの労力と時間と資金を要求した。そのことだけのためではないだろうが、この間に彼は民俗（族）学に関する仕事をほとんど行っていない。ほとんど唯一の例外とも言えるのが、一九一五年夏にサラープルからカザンへ向かう船の上で書き取った「アレクサンデル二世についての詩」を「生ける過去」誌（一九一六年）に発表したこと

〔16〕だが、これもわずかに二ページのものである。また、新聞「カーマ川地方の生活」には新刊圖書を紹介する欄があるが、ここには民俗学関係の本が見られないし、新聞の紙面に民俗（族）学に関する資料が掲載されることもなかった。

そのことのかわりとしてオンチュコフが関わりを持った事業がサラール郷土博物館の創設であった。一八九〇年前後の時期からロシアの各地で地方・郷土博物館が開設されていくという状況下に〔90三九一四〇〕、サラールでは彼の新聞の中で、町とこの地方に関係した博物学・民族学・考古学資料をこの博物館へ提供してくれるようにと市民に対し呼びかけている。さらに彼はこの博物館の文化・啓蒙活動にも積極的に参加し、『サラール地方博物館紀要』（一九二一—一九一四年、全四冊）の出版にも協力を惜しまなかった。また、博物館に基礎を置いた形で「カーマ川地方研究会」も一九一三年—二月に作られ、オンチュコフもその一員として活動を行った。

サラールに戻った一九〇八年から一九一七年までの時期は、全体として見るならば、オンチュコフが自分の郷里での社会・啓蒙活動に没頭していた時代であったと言えることができるだろう。それは、それ以前の民俗学研究の時期とはある点でまったく異質で、時に地味なものと映じるかもしれない。しかしながら、自分の故郷のいわば郷土誌的活動は、現在までのところその全貌が明らかにはなっていないのが残念だが、それ以前の民俗学研究ともつながるだけでなく、革命後の彼の研究方向と緊密に結びついていることは確認すべきである。

4、シベリア流浪

一九一七年はオンチュコフ四五歳の年にあたっている。革命という一大出来事を彼がどのように迎えたのか、に

ついて詳しく知ることができないが、彼の心境に変化が生じたことは認められる。すなわち、一九一八年一月一七日付のA・A・シャーフマトフ宛書簡は以下のとおりである。「去年の三月一日で私は自分の新聞（『カーマ川地方の生活』のこと——引用者）の出版を中止しているの、今はまったくの自由人です。新聞はおそろしく私を消耗させ、決定的にすべての時間を奪い取りました。ペトログラードを出てからというものはずっと、以前に採録した『民衆劇』の出版以外には民族学のためにはまったく何ひとつしませんでした。今、私は休みを取ったので、もう一度、民族学に魅力を感じはじめています。」

だが、彼の希望も国内戦による混乱の中でただちに実現されることはなかった。一九二〇年代半ばまでの時期におけるオンチュコフの活動と生活を示す情報はきわめて少ない。彼自身がA・H・ソボレーフスキイに対して送った手紙によれば、オンチュコフは一九一八年以降イルクーツクに住んでいた。一九一九年には、ロシア地理学協会西シベリア支部の戦争・革命アルヒーフ委員会の命を受けてカーマ川流域の民族学調査を行っている。ただし、その際に記録した資料は残っていない。

一九二〇年春には奥バイカル地方で医師補の職にあつて、チフスの治療に従事していたという。この年、医学を学び直そうとして四八歳の彼はイルクーツク大学医学部へ入学しようとするが、これは果たすことができなかった。そのかわりとして彼は、「それまでの生涯の間ずっと感じていた、哲学と歴史の高等教育のブランク」を埋めようとイルクーツク大学歴史学科に籍を置くことになる。二ヶ月半後、彼が革命前に目ざましい活躍をした民俗学者であることがわかって、彼は同大学の教授推薦の特待生としてロシア文学史講座にとどまっている。その後のネップ到来によって彼は大学から放り出されて、「イルクーツク市内のがらくた市で売食いをする」ような生活を送っている。しかし、こうした困難な状況の中にありながらも、オンチュコフは民族学調査に対する情熱を捨てることがなかった。

一九二二年夏、ロシア地理学協会東シベリア支部は彼に調査旅行を依頼している。行く先となったのは、奥バイカルとペラギンスク郡であった。彼は小舟でバイカル湖を渡り、奥バイカル地方のロシア人だけでなくブリヤート人の一五の村をまわり、ペラギンスクに三週間滞在している。この調査の成果は「対岸の人々と海を越えて（奥バイカル概説）」「ビラゴルスク周辺」という未刊の二つの論文である。

この奥バイカル地方の調査と同じ一九二二年の秋、彼はベルミ大学教育学部のロシア語講座に教授として招聘されている。ここで彼は一九二二―二三年、一九二三―二四年の二学年の間、教授として働いた。

このベルミ時代に彼が行った調査としては、一九二三年夏のチュールドゥイニ地方の資料収集旅行があげられる。もっともこの収集の対象となったのは、モスクワ農業博覧会のための展示品となるもので、農具、木工品、織物、家内装飾品、衣裳などといった民族学的価値を持つ品物であり、口承文芸作品はまったく採録されなかった。だが、彼は調査中の観察として、現代的なテーマを扱ったチャストゥシカ（小唄）やアネクドット（小話）がこのチュールドゥイニ地方にはほとんど浸透していないことを記述している。そしてこの事実が、前年夏に調査を行った奥バイカルでは口承文芸作品がより現代的テーマを反映していたことと比較されるのである〔17〕。このほか、この時の調査の記録としては「かつてのビアルミヤ」と題する三〇〇ページを越える文学作品的報告が書かれていたという〔32三三〕。また、一九二二年にベルミで論文集の出版が計画された際に、彼はこの論文集のために「現代のフォークロア」と題する論文を書きあげている。これは、ヴァートカ県ないしシベリア各地での革命と国内戦の時期に収集された口承文芸に関する論考だというのが、論文集そのものが刊行されなかったために活字にならなかった。このほか、ベルミ大学を中心に活動を行っていた「北方研究会」（П・С・Богословскийを指導者として一九二三年一月に再開）にも参加したオンチュコフは、そこで先のチュールドゥイニ地方の調査報告をしたり、研究会により刊行さ

れた『ベルミ郷土学論集』（一九二四—二八年）に二度寄稿している。このうちの一篇は先述した一九二三年夏のチエールドゥイニ調査の報告であり、もう一篇は、彼がすでにベルミからレングラードへ移ったあとの一九二八年に掲載されたものだが、チエールドゥイニ地方の謝肉祭の様子を紹介した記述である〔24〕。

このように、ベルミにおける研究活動は彼の知的興味にいくらかかなりの満足を与えたかに見えるが、そうではなかったようだ。一九二四年一〇月に彼はA・H・ソボレーフスキイへの書簡の中で「ベルミ大学にいと、とても憂鬱になります」と記している。ペトログラードへ向かうことを望んでいた彼は、同年の一二月にはすでにレングラード（一九二四年一月にペトログラードより改称）にいた。彼の人生で二度目の「上京」である。一二月七日付でモスクワのソボレーフスキイ宛の手紙にオンチュコフは次のように書きつけている。「ここでしばらく私はピーテル（レングラードの古名・愛称——引用者）にいて最高の気分です。ベルミから脱出したことはどんなに喜んで喜び足りることがありません」。

5、レングラード時代

一九二四年暮にレングラードに着いたオンチュコフは、最初からこの都市の学問的環境の真只中へとはいり込むことができた。すなわち、無償の定員外研究員であるとはいえ、レングラード大学付属の西洋・東洋比較文学・言語研究所で働くことになったのである。この研究所はその当時の文献学的研究の最良の部分を担当し、国内でも最高のスタッフをかかえていた。一九二五年一月には、研究所内にフォークロアを扱う「生ける過去」部門が組織され、その議長にD・K・ゼレーニンが、そして秘書としてオンチュコフが選出された。当時、このセクションに参加していた研究者としては、B・Π・アドリアーノヴァ・リベレツ、B・M・ジルムーンスキイ、H・C・ジェルジャー

ヴィン、П・К・シモーニ、Л・Я・シテールンベルグ、А・И・ニキーフォロフ、В・И・チエルヌイシヨーフ、А・А・マカレンコ、Н・М・エリアシ等といった錚々たる名前を見ることが出来る。このセクションが掲げた共同作業のテーマとしては、「東スラヴとその隣接民族の農耕儀礼」（責任者ゼレーニン）、「昔話の形態論」（ニキーフォロフ）などがあり、オンチュコフも「一八一—一九世紀大ロシア人の歴史歌謡」というテーマ（これはВ・Ф・ミールレルの仕事を受け継いだものであった）の共同研究の責任者となっている。彼は自分のセクションについてこう記している、「我々の『生ける過去』部門は研究所内では他のどこよりも活動していて、騒々しいところである。私とゼレーニンはこの研究員たちのために、われわれの親しい民俗学者である友人の全員を連れて来たのだった」。また、彼は一九二四年から一九三〇年までの間、レニングラード大学でフォークロアの講義とゼミを担当している。

ベルミ時代に再開されたオンチュコフの民俗（族）学調査は、この時期になって活発化した。まず一九二六年には、彼は昔話採集を目的としてタヴダー地方（トボリススク県チュメーニ郡）をまわり、四つの村の七人の語り手から八六篇の昔話を聞き取っている。この採集調査を依頼したのは、すでに革命前から活動し、オンチュコフの『北ロシア昔話集』の出版にも全面的支援を行った地理学協会（ただし、革命後は、もちろんのことながら、「帝室」の名はない）の「昔話委員会」であった。この委員会は一九一七年以後はその活動を停止していたが、ようやく一九二四年五月になってメンバーを大幅に変化させて再開したのである。当時のスタッフは、議長が革命前と同じくС・Ф・オリデンブルグ、秘書のП・Н・グリーンコヴァのほか、Н・П・アンドレーエフ、Д・А・ゾロタリョーフ、А・К・セルジブトーフスキイ、А・Е・クドリャシヨヴァ、М・Б・エデームスキイ、また、その後に加わった者としてО・И・カビーツァ、С・П・オブノールスキイ、В・Я・ブロッパ、Ю・М・ソコロフの名があり、先にあげた比較言語・文学研究所のフォークロア部門と重複している者としてはニキーフォロフ、エリアシ、チエルヌ

イシヨーフ、それにオンチュコフも加わっていた〔61三〕。

オンチュコフによるタヴダー地方の昔話採録は、当然のことながら、地理学協会の手によってその成果が出版されるはずであった。その準備作業として彼は「タヴダー地方の昔話」〔20〕と題する調査報告を昔話委員会の年次活動報告書に掲載しているが、これは聞き取った話とその語り手のリスト、ならびにタヴダー地方におけるこれまでの昔話採集についてまとめたものである。オンチュコフの希望、そして彼自らが作成した出版計画書、さらには実現困難と見るやドイツ語訳の形でフィンランドで出版しようとする思いつき、最後にはトボールスク博物館に対する出版依頼（一九三八）——それらすべてにもかかわらず、一九二六年の収集によってもたらされた昔話と「トボールスクの昔話」「タヴダーの語り手」というタイトルを持つ論文は公刊されることなく終り、現在はソ連邦国立中央文学・芸術文書館ЛГБに収められている。今後、ソ連での発表が待たれる。

一九二六年の調査はもうひとつの貴重な成果を残した。それはチュメーニ博物館でのП・А・ゴロツォーフ資料の発見である。この事実は「タヴダー地方をまわって」という短な文章〔21〕の中で紹介されたほか、発見した資料内のテキストを利用して執筆された論文「コストリュークに関する歌謡の三つのバリエーション」〔22〕によって紹介されている。このП・А・ゴロツォーフは法律家という職業に就きながらも、二〇世紀初頭にタヴダー地域の民俗調査を行なったことで知られる研究者である。「チュメーニ郡農民の祭日と儀礼」〔50〕をはじめとして公刊されたゴロツォーフの仕事は、西シベリアのフォークロア研究にとって現在もなお意義を持つものとして知られている。ゴロツォーフの収集成果がこれまで公刊されたもの以外にも、特に昔話をめぐって行われていることについてはオンチュコフが報告したとおりである〔25〕。しかし、現物の確認がなされないために、ゴロツォーフによる昔話採録の成果はこれまでの研究では失われたものとされてきた〔76七〕。だが、ようやくイヴァーノヴァ女史によって、先のオンチ

ユコーフが集めたタヴダー地方の昔話と同じくИГЛАЯにそれが存在することが判明したのであり、革命をはさんだば二〇年の間隔をおいて同一地域の昔話の存在状況を検討しうる可能性が生まれたと言つてよい。

レニングラード時代のオンチュコーフにとって第二回の民俗調査は、先のタヴダー地域の調査の翌年の一九二七年夏に行われた。調査地は、タヴダー地域近くでその西に位置するヴェルホトゥーリエ地域である。彼はこの二つの隣接地の昔話伝統を比較対照してみようとしたらしいが、ヴェルホトゥーリエの昔話が豊富でなかったためにこのねらいは功を奏さなかった。この時の調査記録は「ウラルのフォークロアから」として、地理学協会発行の『一九二七年の昔話委員会 活動概観』に発表されている〔23〕。

この第二回の調査に比べてはるかに多くの収穫を生んだのは、翌一九二八年夏のレニングラード近郊ロデーノエ・ボーレ郡の村シヨクシオーゼロへの調査である。この時の調査は民族学者、社会学者も加えたもので、ひとつの村の経済的・民族誌的・精神的生活を全体的に把握することを目的としていた。オンチュコーフに課せられたのは、この村の昔話のレバトリイを可能な限り記述すること、四つの小村から構成されるシヨクシオーゼロ全体の一八八人の住民中、二八名から一〇三の話がオンチュコーフによって記述された。採録された昔話のテキストはやはり出版されずに現在に到っているが、昔話のレバトリイのリストは「ある村の昔話」というタイトルを付して『C・Φ・オリデンブルグ記念論文集』（一九三四）に収められた〔27〕。

このような一九二〇年代後半にオンチュコーフが行った三回の民俗調査は、現在までの時点ではいまだその全体の成果が明らかになっていない。にもかかわらず、彼が残した記述の中の活字になった部分はその仕事の大きな価値について十分想像させるものである。しかも、その断片的に知りうる成果の中で見落とすことができないのは、「現代のフォークロア」ないしアクチュアルな歴史を反映するフォークロアに対する強い関心である。この点については、

未刊のアルヒーフ資料を詳細に点検したイヴァーノヴァ女史の記述によってより明確に知ることができるが、彼女によればこうしたオンチュコフの関心は第一次大戦後に生じたものであるという。すなわちこの時期以後、彼は政治的傾向の濃厚なアネクドットやチャストゥシカに強く興味を持ち、それは革命後、国内戦とその後の混乱といった時代の流れとともに決して弱まることがなかったのである。オンチュコフによれば、口承文芸は歴史の転換期における民衆の心理とイデオロギーを学ぶことにとって重要な資料となるというのである。

そうした問題意識のもとで実行された一九二〇年代後半の調査が、彼のみのものでは決してなかったことは言うまでもない。注目すべきことに、対象地域こそ異なるとはいえ一九二〇年代後半にモスクワ、レニングラードの研究者グループが実に精力的な民俗調査を展開しているのである。これに関しては別稿で記したので〔95〕、ここではその調査隊の派遣機関と参加者、調査地などを記すにとどめておくが——国立芸術科学アカデミー内フォークロア小部門（指導者ユーリイ・ソコロフ、一九二六—一九二八年に「ルイブニコフとギリフェルジニングの足跡をたどって」北ロシアを三回にわたって調査）、国立芸術史研究所内社会学委員会農民芸術部門（一九二六—一九二九年に農民の伝統文化を「総合的」に調査する目的で、奥オネーガ、ビーネガ、メゼーニ、ペチョーラといった北ロシアを対象地域とする）——オンチュコフもまさにそうした時代精神の中にあつたのである。

6、晩年

一九二〇年代も末を迎えると、オンチュコフはもう民俗調査を行わなくなる。調査に対する情熱を失ったのか、それとも、六〇歳を真近かにした年齢を考えてなのか、あるいは、一九二〇年代半ばすぎまではフォローしえたフォークロアに体现された農民文化が見えなくなったためなのか、農村社会が一九三〇年を目前にして大きく変質しつつ

あったことのためなのか。いずれの理由であるとしても、オンチュコフの研究方法はこの一九二〇年代末を境として急速に変化している。すなわち、一九二九年に発表された論文「コンスタンチンとアンナに関する禁止された歌」〔26〕は、皇帝バーヴェルの第二子コンスタンチンとサクソン王国のユリアナの結婚の失敗という出来事とフォークロアとの関わりを論じたものである。革命前に彼が偶然収集したアレクサンドル二世の歌の場合と同じく、オンチュコフにとって、歴史上の事件がフォークロアにいかに関連したかという問題は彼の重要な研究テーマであった。そしてこのテーマは、この時期に及んで多くの文献資料の検討を通じて大きく展開されていったのであり、後述する「デカブリストに関する歌謡と伝説」という標題の論文は一九二九年論文の延長として、まさにこの領域における彼の代表作となった。

一九三一年、オンチュコフは北ロシアの町ニコリスク（現在のヴォログダ州内）へ移らざるをえなくなる。理由は不明である。ここでも彼は、方言をはじめとして諺、格言、チャストゥシカを採集している。翌三二年には再びレニングラードへ戻る。レニングラードでは『ロシア語辞典』の編纂に参加していたことが一九三三年一月に彼が取り決めた協定書によってわかる。おそらく、革命前からのフォークロア研究の実績と方言研究に対する関心と深い造詣（ニコリスクでの方言収集は辞書編集への参加を念頭に置いていたものであっただろう）、それにやはり革命前からの多数の文献学者との親交がそうさせたものと思われる。

一九三五年に彼は科学アカデミーの年金を受けた形でペーテンザへ移った。この時期にあっても、オンチュコフの研究に対する熱はほとんど衰えを見せていないように思われる。それ以前に書かれたとはいえ、「デカブリストに関する歌謡と伝説」〔28〕は四〇ページ近くの大論文で、デカブリスト事件とフォークロアとの関連を多数の文献資料によって論証したものである。先の「コンスタンチンとアンナに関する禁止された歌」と同じく、「歴史とフォークロ

「ア」という問題設定の枠に収められる仕事である。また、未刊論文「プーシキン時代の詩人Д・П・オズノビシンの知られていない歌集」は、彼が先に述べたゴロツォーフの資料の中に見出した歌集に関する紹介である。実はこの一九世紀の詩人が民謡収集家として活躍したことは、ようやく近年になって『文学遺産』（七九巻、一九六八年）〔69〕により明らかになったのであるが、現在、ИГАНに眠るオンチュコフの論文はこの興味深い事実を一九三〇年代に指摘していたのである。

このほか、ペーレンザ時代のオンチュコフが関心を持ったものとしては文学と口承文芸の関連をめぐる問題があった。一九三六年には論文「ネクラソフと文学のナロードノスチ」が発表されたほかに、特に注目すべきものとしてプーシキンとフォークロアの関わりというテーマがある。このテーマについて彼の残した仕事は「プーシキンはいかに仕事をしたか」「フォークロアにおけるプーシキン」と題する論文であるが、これも残念ながら未刊のままである。特に後者の興味深いタイトルの論文については、一九三七年三月三一日付ボンチルブルエーヴィチへの手紙の中に次のように書いている。「私は『プーシキンに関するフォークロア』という論文を書きあげました。……これまでプーシキンにおけるフォークロアについては何度も書かれてきましたが、プーシキンその人についてのフォークロアにはまだ誰も触れませんでした」。

さらに、イヴァーノヴァ女史の記すところでは、「民衆版画」「民衆劇におけるラージン伝承」「最近の宗教的信仰」「プガチョーフに関する最初の長編小説」といったタイトルの論文がИГАН所蔵のオンチュコフ・フォンドに見出されるという。これらがすべてペーレンザ時代の仕事かどうかを確かめることはできないにせよ、彼の問題関心の広さは十分知りうるであろう。また、生きたフォークロアの資料収集についてもその熱意は失せなかったことは、一九三六年夏に妻のА・А・ブラーフキナとともにペーレンザ東方でヴォールガ川に面したジグリーに出かけた際の出来

事によってわかる。オンチュコーフはそこで、ひとりの才能ある語り手C・Π・ムホルトフから昔話二〇篇と歌謡一篇、ラージンに関する伝説を書き取ったのだった。

一九三〇年代の末にオンチュコーフは収容所に送られたらしい。そのように考えられるのは、『文学小百科事典』の彼の項目の中で「死後に名替回復された」の一文があるためである。これまでのオンチュコーフに関する数少ない記述では、この点について記したものはまったく見出すことができない。イヴァーノヴァ女史も「彼の研究活動は一九三〇年代の末も末に中断された」としか記していないのである。オンチュコーフが収容所へ送られた理由はまったく不明であり、これまで記してきた彼の研究活動と生活の範囲からは推測しうる材料もない。

オンチュコーフ死亡の年月日についても、これまでの彼に対する記述では一九四一、一九四二、一九四三年ときわめて不明確であるが、イヴァーノヴァ女史によれば一九四二年三月であり、K・B・チストーフが執筆した『文学小百科事典』には「一九四二年三月六日、ペーレンザ」と記されている。より具体的な後者が正しいと思われる。

七一歳を直前にしてのオンチュコーフの死であった。彼の「悲劇的運命」について、一九四七年に友人のA・B・フラブロヴィーツキイによって知らされたプリーシヴィンは同年三月五日付の返信で次のように書き送った。「私は、H・E・オンチュコーフの最期の状況に関するあなたからのたよりを悲しい気持で読み終えました。彼は私を『鳥も驚かぬ地』への旅行へと導き、その地について私は最初の本を書いたのです。……オンチュコーフは中味のない愛国者ではなく、本質的で自覚的な愛国者でした……」〔41三四〕。

III オンチュコフの仕事とその意味

1、その仕事の全体像

民俗学者オンチュコフの仕事全体として見直してみることにする。

まず、彼が行った調査についてはっきりと言えるのは、調査時期が一九〇〇年代初頭から半ばの数年間と一九二〇年代後半のやはり数年に集中しているということである。むろん、この二つの時期以外にも口承文芸作品は採集され、その成果がすべてではないにせよ公刊されている（例えば〔16〕）し、最晩年にいたるまで、彼が一貫して資料収集に対して変らぬ情熱と執念を持ち続けていたこと（それに多少の衰えが見られるとはいえ）は事実であり、これについては上で記したとおりである。

だが、やはり何と言っても、一九〇〇年代初頭の合計六回、一九二〇年代後半の三回の調査はその規模と時期的密集度、そして成果という点で、彼の研究活動全体の中では抜きん出ている。しかもこの二つの時期がロシア・ソビエト民俗（族）学の収集・研究史の中でも最も多産な時代のひとつに該当していたことはたんなる偶然であるとは言えないのではあるまいか。この二つの時代が、ロシア革命という一大社会変革を間に置きながらも、それぞれが研究史の上で大きな転換期であったことを想起する時、オンチュコフの行ったフィールドワークがはらんでいた意義の大きさは十分推しはかることができるだろう。

彼のこうした大きな二つの「フィールドワークの時代」は同時に、その調査地域の選択とも対応している。彼の選

扱には、むしろ偶然的要素もあったはずだろうが、結果的に見れば巧みな「戦略」があったと考えられなくはない。すなわち、一九〇〇年代の北ロシアと一九二〇年代の西シベリアはともにロシア「辺境」の地であったのであり、彼は民俗研究の一大転換期において各時代にとり最も「遠い」地域を選び取ったのだった。

もちろん彼のそうした選択は彼のみのものではなかった。一九〇〇年前後の北ロシアが民俗学者のみならず、芸術家たち、インテリの強い関心の的となっていたことは前章のビリービンやブリーシヴィンの例で示したとおりである。また、以下でふれるブリーナ、昔話の収集が、特に一九〇〇年前後、ないしは一八九〇年代からの民俗学・民族学の発展の中で北ロシアの地でも精力的に行われていたことはオンチュコフの調査地域の選択に対しても大きな影響力を持っていたはずである。一方、一九二〇年代半ばの西シベリア、ないしシベリアについても、オンチュコフの選択が彼のオリジナルでなかったことは明らかである。すなわち、革命と国内戦による「社会的混乱」の中で、革命前からすでに活躍していた多くの民俗(族)学者が地方へ拡散していくと同時に、地方都市でも独自の研究活動が展開されていた。サラートフにおけるB・M・ソコロフやA・Π・スカフトゥイモフ、カリニンでのЮ・M・ソコロフ、スモレンスクにおけるΠ・M・ソボレフ、そして特にイルクーツクを中心に目ざましく活躍したM・K・アザドーフスキイ、Γ・Θ・ヴィノグラドフなどがこうした地方の研究を積極的に推進していったのだった。オンチュコフが自分の郷里からはど遠からぬ西シベリア地域を調査の対象地として選んだことは、このような時代の動向の中でとらえられるだろう。しかしながら、彼の二度のフィールド地域の選択が、そのような外側からの、ないしは狭義での時代の要請によるものだけでなかったことは以下で述べたいと思う。

彼の研究成果についても、この二度のフィールドワークに対応する形で一九一〇年頃までの業績と一九二〇年代半ば以降のものに二分される。業績の点数のみをあげることは重複や分量の相違、それに特に質の問題を無視するこ

とになるが一応の目安とするために数えあげてみるならば、革命以前に一六点、革命後が一二点となる（書評や短かな記事風のもの、再録などを除く。ただし書誌『ロシア・フォークロア』（78）に収められていない革命前の仕事——古儀式派に関する資料収集の成果を報告したものなど——三点を含めた。この合計二八点は本稿の最後にオンチュコフ主要著作目録としてあげた）。この点数がきわめて少ないことは、革命前から活躍していた同時代の民俗（族）学者たち——例えばД・К・ゼレーニン、М・К・アザドーフスキイ——の業績点数と比較すれば一目瞭然である。今後の調査とそれにもとづく草稿の活字化によっておそらくは業績点数はふえるものと想像されるが、それでも現在まで判明している限りでの主要な仕事は数量の点で限られていると言わざるをえない。しかも、革命前の業績が単行本の形となった三冊を含めて全体として多くの評価を受けているのに対し、革命後のものが全体的にまとまりを欠き、テーマの点での集約性・一貫性を持たぬことも好対照をなしている。だが、特にこの革命後の部分については、上でたびたび参照したイヴァーノヴァの紹介を見るように、将来にあって公表すべきであらうし、その可能性も大きいだろう。

それでは、こうしたさほど多くはないオンチュコフの著作に見出される問題とは何か。この点をまず、革命前の代表的仕事となった「三部作」に沿って見ていこう。

2、「三部作」

一九〇四年に帝室ロシア地理学協会の紀要第三〇巻として刊行された『ベチョーラのブイリーナ集』はオンチュコフの一九〇一ないし一九〇二年のベチョーラ川下流域調査の成果である。調査によって採録されたブイリーナのテキストの一部ならびにその特徴についてはすでに「生ける過去」「帝室アカデミーロシア語・ロシア文学部門通報」

などに発表されており〔3・4・5〕、また、調査地域の簡単な民族誌もフィールドノート形式で二つの論文〔1・2〕として書かれていたが、『ペチョーラのブリーナ集』はそれらの先行して発表されたものと未発表のブリーナのテキストを集大成したものである。

収録されたテキストは全体で一〇一篇であるが、それはさらに次のような構成を持っている。すなわち、全体は地域によってまず、ウスチリツィーリマ郷とプストジョールスク郷の二つに大別され、前者の地域では九つの村の七名の語り手によって語られた七一篇、後者では五つの村の八名による三〇篇が、すなわち全体として合計すれば、一四の村の二五名の語り手（うち女性は七名）の作品が収録されている。テキストの配列は、地域の大きなものから小さなものへ（郷↓村、部落）、さらにその中では語り手別という形で行われている。これは、A・Φ・ギリフェルジーンが『オネーガのブリーナ集』（一八七三）において行った配列方法である。ギリフェルジーンの意図は、一地域内ならびに個人の作品レパートリーをすべて拾いあげることにあつたが、オンチュコフもまた、このギリフェルジーンの意図と配列法とを踏襲したと言える。語り手として、収録点数の多い者を何人か、多い順にあげてみれば、ウスチリツィーリマ村のΠ・P・ボズデエーフの一六篇（彼はブリーナ以外にも巡礼歌などをオンチュコフに披露しており、その成果は〔10〕に発表されている）、ペドーヴァヤ村のΠ・Γ・マルコフの九篇、ザメージノエ村のA・E・オスターシヨフら四名による八篇などである。

オンチュコフのブリーナ・テキスト採録の目的である一地域のレパートリー全体を明らかにすることは彼自身が『ペチョーラのブリーナ集』の序論としてその巻頭に付せられた「ペチョーラにおけるブリーナ詩」の中に記しているが〔4〕、このことは同時にひとつの欠陥を持つことになる。すなわちオンチュコフはテキストの編集にあたって、同一ないし類似した歌詞が別々の語り手によって歌われる時にはその一方を省略したり（第四五、四八、

五五とその注を参照)、同一の語り手でも反復があればそれを不必要として削除したのである。反復ないし筋からは外れたエピソードがフォークロアのテキストロジの立場からすれば、不必要でないだけでなくフォークロアの本質を示しうる不可欠な部分であることは現在では当然とされるが、オンチュコフの場合にはこの点の理解が見られないと言える。そしてこうした問題点ゆえに、この『ペチョーラのブイリーナ集』はこれとほぼ時期を同じくして刊行されたブイリーナのテキスト集——A・B・マールコフが一八九八—一九九九年に白海沿岸で一名の語り手から収集した一一五篇を収める『白海地方のブイリーナ集』(一九〇一)〔59〕、そして特に最も基礎的な資料集として今なお認められる〔44〔五七〕、A・M・グリゴリーエフが一八九九—一九〇一年にアルハーンゲリスク県の各地を三度にわたって調査した成果として四二四篇のテキストを含む『アルハーンゲリスクのブイリーナ・歴史歌謡集』(一九〇四、三九、一〇)〔51〕——と比較した時にその価値をいくらか減じるものとなるのである。

しかしながら、オンチュコフの『ペチョーラのブイリーナ集』がこうした同時代の北ロシアの叙事詩的伝統の発掘の試みとともにブイリーナ研究の上で貴重な仕事であることは疑いない。ほぼ半世紀以前にΠ・H・ルィブニコフが、一八七〇年代にA・Φ・ギリフェルジニングが切り拓いた北ロシアの口承叙事詩伝統へのアプローチは今世紀初頭に継承され、オンチュコフもその価値ある一翼を担ったのである。さらに、この『ペチョーラのブイリーナ集』について言えば、その巻頭を飾る「ペチョーラにおけるブイリーナ詩」という三五ページの文章はペチョーラ地域のすぐれた民族誌として読むことができる。A・И・ソボレーフスキイは地理学協会の一九〇四年活動報告の中で、この点を特に次のように記している。「オンチュコフのブイリーナ集には長い序文が付いているが、それはペチョーラ地方とその住民についての資料を与えてくれる。……この資料は興味深いもので、これに匹敵しうるものとは言えわずかにオネーガの語り手に関する有名なギリフェルジニングの論文があるだけである」〔64〔九〕〕。テキストそれ

自体ではなくて、むしろ序文の民族誌的重要性が指摘されていること、しかもギリフェルジーンと比較される形で述べられていることは興味深い。もっとも、テキスト自体についても『ベチョーラのブイリーナ集』には、オンチュコフによって新たに発見された題材——「ルカー・ダニロヴィチ」、「ダニラ・ポリソヴィチ」、「プトマン・コルイバーノヴィチ」——が収められていることも忘れられてはならず、そのこともオンチュコフがブイリーナ研究にもたらした大きな功績であった。

『ベチョーラのブイリーナ集』が同時代の評価を受けていた事実については上で記したが、オンチュコフ自身はブイリーナの収集に満足していなかったようである。それは、既述のように考古学大学への入学と結びつけられるかもしれない。そして彼自ら、一九〇三、〇四年のボモリエ、オローネツ調査では「ブイリーナは採録しなかったが、これはギリフェルジーンやグリゴリエフが採集したあとではその理由がないからだ」(八三七)と記しており、ブイリーナ研究とは縁を切った形となっている。このブイリーナにかわって彼の調査と研究の中心的テーマとなったのが昔話であり、その成果が『北ロシア昔話集』(一九〇八)である。

『北ロシア昔話集』の成立のいくらか「偶然的」な事情、地理学協会紀要(第三三巻)として出版され高い評価を受けたこと、また、レーニンにちなむエピソードなどについては前章で記したとおりである。

構成について見れば、全体の番号は三〇三までだが実際にはひとつの番号にいくつかのバリエーションが含まれているため、実際には三一〇篇が収録されている。内訳はアルハンゲリスク県一五三篇、オローネツ県一五七篇、で、ここには、すでに述べたように、A・A・シャーフマトフ、M・M・ブリーシヴィン、Д・ゲオルギエフスキイによって採録されたもの、そして地理学協会アルヒーフから選択したものも含んでおり、オンチュコフが自分で収集したのはアルハンゲリスク県の一四〇篇、オローネツ県の三一篇の合計一七一篇で、これは『北ロシア昔話集』全体

の五五パーセントにあたっている。また、ここに収められたテキストの扱い方を四名の収集者別に検討してみると、オンチュコフのそれはブリーシヴィンの場合よりも良好だが、音韻論や方言学の点でやはりシャーフマトフの採集テキストには及ばないと言わざるをえない。

この『北ロシア昔話集』と『ペチョーラのブリーナ集』とを比べて見ると、何よりも顕著なのは語り手に対する態度の変化である。すなわち『昔話集』も全体の配列は地域↓語り手（ただし地域は県レベルのみ）となっているにもかかわらず、長大な序論「北ロシアの昔話と語り手」は語り手と彼らが生活する環境をめぐってきわめて詳細な記述となっている。語り手別の配列という形で具体化された語り手への注目が『昔話集』の出発点となったと言っても過言でないのである。もっともこの点は、彼の昔話収集の契機が偶然的なものであったこと、すなわち地域全体のレパートリーをすべて尽くすことができなかったという外的な事情によって生じたことかもしれない。オンチュコフのねらいは、やはりブリーナの場合と同じく、ギリフェルジーンが行ったような一地域のレパートリーをすべて汲みあげることにあつたと言えるのである。もしもこのねらいが成功したとすれば、それはロシアの昔話収集にとつてそれまでの試みにはない最初のものとなったかもしれない。しかしながら、彼の意図とはいくらも異なった形においてではあれ、ロシアの昔話研究において語り手の存在に対する本格的な注目はオンチュコフをもって開始されたのである（彼以前にもこの点の認識は、Д・А・ロヴィンスキイ、Д・Н・サドーヴニコフなどに不十分ながら見られるものであるが）〔71^②〕。

この語り手に関する問題をはじめとして、昔話に対するオンチュコフのアプローチは多面的である。語り手の住む土地的条件とその民族誌の問題、大ノヴゴロドの影響、生業と昔話の関連、昔話の「地方色」等々を扱った、冒頭を飾っている論文「北ロシアにおける昔話と語り手」〔11^{XXI}—^{XLVIII}〕はロシア昔話研究の歴史で価値ある労作である。

『北ロシア昔話集』について記したK・B・チストーフによれば、この昔話集を「手にしてただちに驚嘆する二つの特性」があるという。それは、まず第一に、魔法昔話に比べて物語的昔話が圧倒的に優勢であり、社会的内容と鋭い風刺を備えた昔話が豊富であること、第二として、語り手の社会的意識が強いという点である⁽¹⁰⁾。事実、多くの昔話で主人公となっているのは貧しく、時に落ちぶれた農民や作男であり、彼らがきびしく困難な状況の中で司祭や地主、主人や商人たちとたたかっている様子が語られるのである。風刺性、社会性、世態性といった『北ロシア昔話集』に収められた話の特徴の一面は、むしろこの資料集のみに見られるものでなく、当時の、より正しくは革命前二〇世紀初頭のすぐれた昔話集——例えば、Д・K・ゼレーニンの『ベルミ県の大ロシア昔話集』(一九一四)〔53〕と『ヴァートカ県の大ロシア昔話集』(一九一五)〔54〕、ソコロフ兄弟の『ベルオーゼルス地方の昔話と歌謡集』(一九一五)〔89〕——にも認められるものだったが、そうした同時代のテキスト公刊の中でも時代的に先行しており、それらを準備したのがオンチュコーフの仕事だったと言える。

しかもここにあげた同時代の昔話収集の成果は、一九世紀半ばにA・H・アフナーシェフらによって開始されたロシア昔話研究の新たな段階への到達を示すものであり、ロシア昔話の収集と出版の歴史の中で最も多産な時期のひとつを形成したのである〔70三〕。こうした「黄金期」を生み出すのに大きな力となったのはロシア地理学協会民族学部門であり、この部門内に公式には一九一一年に設置された昔話委員会は先にあげたゼレーニンの二冊の『昔話集』の出版を実現したほか、地理学協会内アルヒーフに収められていた昔話の公刊(一九一七)〔88〕も行ったのである(一九世紀末から革命後、すなわち一八九六—一九三〇年の昔話委員会の活動については〔61〕)。オンチュコーフの『北ロシア昔話集』の出版は、この委員会の正式な発足以前に属すとはいえ、地理学協会の全面的な指揮によるものであり、今世紀初頭の昔話研究の先駆的仕事として評価されるだろう。

先のチストーフが指摘していない点として忘れることのできないのは、何と言ってもこの『北ロシア昔話集』に収録されている話がいわゆる「昔話」だけでないということ、より具体的に言えば、ここには歴史的伝説、宗教伝説、財宝や悪霊の言い伝え、アネクドットも多くが含まれているということである。⁽¹⁾この点はオンチュコフ自身も序論の中ではっきりと確認しているとおりであるが、こうした「昔話」に対する既製の分類枠にとらわれぬ立場は後世の彼の仕事の中にも見出せるものである。例えば一九二七年の論文「タヴダー地方の昔話」では、彼は「簡略化のために、かりに昔話というタームを用いる」と述べ、そこにはいわゆる昔話のほか、宗教伝説、魔術師や森の精についても話も含めようとしている〔20元〕。

このように見てくると、オンチュコフのテキスト集はその標題にもかかわらず、「昔話」というジャンルからは外れた、またはそのジャンル区分からは排除されることの多い散文的口承作品を収めていることがわかる。それは社会性・世態性と、伝説性・宗教性を重視した点で、ジャンルとしての「昔話」に対するいわば挑戦的な試みであった。しかもこうした彼の脱ジャンルのな昔話収集が生まれた背景にあるのが、上で述べた二〇世紀初頭のロシア昔話研究とその対象となった社会性の強い昔話の存在であることを想起する時、オンチュコフの採録した昔話がすぐれて時代の表現となっていることを認めざるをえないであろう。

オンチュコフの「三部作」の最後を飾ったのは、一九一一年に刊行された『北ロシア民衆劇集』〔15〕である。テキストは一四一ページ、巻頭に一六ページの序論が付けられている。テキスト本文として収められているのは、「マクシミリヤン皇帝」二、「小舟」二、そのほかはそれぞれ一本ずつで「盗賊団」「地主」「騎手と馬医者」「にせ地主」「マヴルーフ」「バラーシャ」の合計一〇本の民衆劇の台本である。これらはすべて一九〇五―〇七年のアルハンゲリスク、オローネツ両県の調査の際に得られたものだが、このうち八本はオンチュコフが農民からじかに採録

したもので、残り二本はその土地の手稿から書き取ったものである。この中で特に注目すべきなのはテキストの冒頭に置かれた「マクシミリアン皇帝」で、これは四七ページというこの資料集全体の三分の一を占め、しかも筋の構成の点でもこの題材を扱ったバリアントの中ではきわめて詳細なテキストである。ただしこれは彼の直接の聞き書ではなく、彼が入手した草稿から書き写したものである。

オンチュコフがこの『北ロシア民衆劇集』に収録した作品は、どれも彼以前の時期にすでに研究者によってその存在が知られていたものばかりである。一部は一九世紀半ば以後の回想記や旅行見聞記の中にその劇の筋や様子が紹介されていたし、一八九〇年代以降には「民族学評論」「生ける過去」といった民俗(族)学専門誌にも、「マクシミリアン皇帝」「小舟」が紹介されるようになっていた。例えば、チエルニーゴフ県で採録された「マクシミリアン皇帝」のテキスト〔42〕、H・H・ヴィノグラードフがコストロマーで収録した「マクシミリアン皇帝」のテキスト〔47〕など。しかし、オンチュコフが行ったようなかなり広い地域での複数テキストの公刊は彼以前には見られず、文字通りオンチュコフのテキスト集は北ロシアのみならずロシア全域においても最初の試みとして画期的な意義を持つものであった。しかも、序論の中で、ニジムオーゼロの農民から採録した「マヴルーハ」について「これは、土地の聖職者が上演を禁止して以来上演されなかった」と記す時〔15 IX〕、オンチュコフにとって関心のあるのは民衆劇の持つ強い風刺性と社会性であったと言っても間違いではあるまい。

現代ソ連におけるロシア民衆演劇研究の第一人者であるH・H・サーヴシキナ女史は「オネーガにおける民衆劇の採録」と題する論文の中で、オンチュコフの収集が農民からの再話か手稿によるもので直接、芝居を見ての書き取りでないことを指摘しながら〔83三四〕、それでもオンチュコフの仕事の意義を高く評価し、彼のテキストを繰り返して紹介、引用するのである。オンチュコフが調査の成果をまとめて発表した論文「北ロシアにおける民衆劇」

〔14〕と『北ロシア民衆劇集』は文字通り今世紀初頭の民俗学の「一大事件」〔83三〕であった。

3、その問題意識と現代的意義

このように見てきたオンチュコフの「三部作」は、言わば彼の代表作として現在までの、そして今後も含めたロシア民俗学の貴重な成果であった。この三部作なしには、ブイリーナ、昔話、民衆劇という三つのジャンルの研究史ないしジャンルそれ自体を語るができぬと言ってもよいであろう。しかしながら、同時に、三部作に具体化された彼の民俗学へのアプローチと関心がそれのみにとどまらなかったこと、そして彼の関心領域がきわめて幅広いものであることは忘れてはならない。三部作以外の彼の仕事を考慮することは彼の研究活動の全体像を見る上で不可欠であるのは当然だろうが、むしろ三部作以外の、言わば三部作からもれた部分にこそオンチュコフの研究の「真価」があるのではないか、というのが筆者の考えである。

口承文芸のジャンルの中で彼が収集を行ったものは、ブイリーナ、昔話、民衆劇の三つ以外に、巡礼歌、婚礼歌、歴史歌謡、チャストゥシカなどにわたり、叙情歌、謎々、諺などを除くほぼすべてのジャンルに及んでいる。さらにはこの口承文芸作品のほかに、方言、民芸品、聖像画、教会の文書なども彼の収集・調査対象になったことは前章で述べたとおりである。しかし、問題とすべきはこうした調査対象そのものについてではなく、調査の基底に見出される彼の問題意識であらう。そしてこの問題意識は方法論の上から次の二点としてまとめられる。

まず第一にあげられるのは、文献資料に対して向けられた、口承資料に対するのに匹敵しうる着目ぶりである。このことは、一九〇〇年代のフィールドワークでの特に古儀式派に関連した各種文書の調査、一九二〇年代にはП・А・ゴロツォフ資料の発見とその利用、または「文学とフォークロア」の問題に対する関心などにはっきりと示さ

れている。

第二としては、処女論文「チュールドゥイニ郡をまわって」以降、不斷に見出すことのできる「民族誌」的関心であり、これは彼のフィールドノートとして発表された文章がどれも短かなものであるにもかかわらず、独自のスタイルを持つ記述になっていることにより確認できる。そこには彼の記述能力を十二分に感じさせるのであり、それは昔話の語り手を生んだ土地の記述についても、また、民衆劇の演者たちそのものについても、儀礼の様子についてもいかななく発揮されている。むしろそこには現代の「民族誌」が持ちうる「構造」に対する方法論的アプローチがあるわけではなく、むしろどちらかと言えば「半小説的」な記述が見られるのだが（それはおそらく彼のジャーナリストとしてのセンスと結びついているのかもしれない）、二〇世紀初頭の口承文芸テキスト重視の民俗学の中であって彼の記述は新鮮な、ひとつの新しい方向をはらんでいたのである。

このような二点の方法論的意識はオンチュコーフの中で十分に展開され、具体的な成果を生んだとは決して言えないだろう。それは萌芽を見せたのみで未完のまま終ったものであるが、この二点がうまく絡み合って多少なりとも成果をもたらしたテーマとしてあげられるのが、宗教的異端である古儀式派に対するアプローチである。

すでに前章で述べたごとく、オンチュコーフは北ロシアを調査地に選んだことに関連して最初からこの異端教徒の生活に興味を抱いていた。オンチュコーフの生まれた西シベリア地域も辺境として多くの分離派を受け入れていたもので、このことも影響を与えたことは十分に考えられる。彼の仕事における古儀式派グループへの言及はすでに処女論文の「チュールドゥイニ郡をまわって」〔1〕以来見られるが、特にこのテーマに関しては「ペチョーラ下流域における分離派」〔2〕「遺物と古儀式派」〔8〕という二論文が書かれている。そしてこれらの中には、分離派の教会内に収められている資料の発掘と、この異端教徒たちのひっそりとした、しかしきわめて伝統に忠実な生活の全体の記事

述とが巧みに統合されているのである。加えて、分離派というテーマの選択それ自体の意味がきわめて重いことを忘れてはなるまい。宗教研究あるいは宗教史研究、一九世紀後半からは歴史学の一部でしか扱われてこなかったこのテーマがようやく民俗学・民族学的視点によってとらえられるようになったのは二〇世紀初頭であった。例えば、ロシア地理学協会民族学部門紀要の第三五巻として出版された『ロシア分派の神秘主義者の歌謡』(T・C・ロジデストヴエーンスキイ、M・H・ウスベーンスキイ編、一九二二)〔68〕はそのほんの一例であり、このほか、多数のテキスト集や調査報告が発表された〔78「六六」〕。しかもこうした民俗(族)学的関心の高まりはたんに偶然によるのではない。それは、古儀式派や各種分派を合法化し宗教活動の自由を認めた一九〇五年四月一七日勅令が發布されたこと〔99〕と無縁ではなかった。一九〇五年革命時における反体制側に対する譲歩として布告されたこの勅令が、一方では古儀式派を中心とした新聞・雑誌など出版活動を活性化させ(例えばП・П・リャブシンスキイにより一九〇九年から発行され始めた新聞「ロシアの夜明け」、そのほか、ニージニイ・ノヴゴロドで一九〇六―〇七年ないし一九〇八―〇九年に発行された月刊誌「古儀式派」、モスクワでは一九〇八―〇九年に「古儀式ボモリーエ派雑誌」、キーエフで一九一〇―一六年に発行の月刊誌「古儀式派の思想」など)、それを契機として古儀式派・旧教運動の「刷新的潮流」〔46〕をもたらしただけであり、他方では、多くの民俗(族)学的研究を生み出していったのである。オンチュコフもこうした時代の展開の中において、古儀式派というある意味で時代にとって最も焦眉のテーマを選び取ったと言えるだろう。

オンチュコフが分離派に対して示した関心はこの二〇世紀初頭の彼の研究の中に読みとれるばかりでなく革命後も晩年になっても持続していった。一九二〇年代半ば頃には、H・A・コトリャレーフスキイ記念論文集のために「最近のロシア民衆の信仰について(分派、古儀式派、正教、改新派)」と題する論文を執筆したとされているし〔32

三〇、一九三〇年代には、当時、国立文学博物館の館長の地位にあったB・J・ボンチリブルエーヴィチの依頼によって博物館に収めるべき分離派関係の文献を助言し、ペーリンザにおける異端派資料を送付している〔40三六〕。だが、全体として見たオンチュコフの仕事の中でこの宗教異端派というテーマへの関心は革命前に比べて具体的な成果をもたらしてはいない。むしろ、この宗教異端派に対する民族誌的・古文獻学的アプローチ、ならびに異端派の持っている「現代性」と「歴史性」に対する注目は、オンチュコフの他の仕事の中で展開された（むしろ不十分な形ではあるが）と考えられる。彼が口承文芸の中でもブリーリーナや昔話とともに特に時代を反映したチャストゥシカやアネクドットに強い関心を示しながらも、同時に、歴史上の事件（アレクサンドル二世の死、コンスタンチン・バロヴィチとアンナの不幸な結婚、そしてデカブリスト事件など）とフォークロアの関わりを考えようとし、文学作品ないし作家とフォークロアの関連を文獻学的方法でとらえようとした（例えばオズノビディシンについて）のは、まさに彼の持っている独自のアプローチとそれを支える問題意識を示したものである。

上で筆者は、分離派の文化というテーマを除いてほとんど未完で結実をもたさなかった二つの問題設定について記した。この二点を現代の民衆文化研究という視点からとらえ返すとすればどうであろうか。そこには、時代的制約という言葉では決して済ましてしまうことのできぬ問題がはらまれていると言わねばならない。例えば、第一点の文獻資料への着目に関しては、現在のソ連で目ざましい成果をあげつつある「古文獻学（アルヘオグラフィー）」的研究（これについては拙稿〔97五〇〕で紹介した）との関連でとらえ直すことができるし、第二の民族誌的アプローチについては、これも近年のソ連にあって見直されているフィールドノートの意義とこの見直しにもとづくノートの発表（例えば、一九二〇—四〇年代のH・II・コルバコーヴァの調査ノート〔55・56〕）とつながるものとなろう。

IV おわりに

オンチュコフにとって、フォークロアとは「歴史性」と「現代性」とを同時に持った民衆文化であった。このことを認めた上で彼が選びとった調査地域と調査対象は、まさしく「時代」の枠からは外れた「辺境」であり、「辺境」であるがゆえに最もすぐれて「現代的」なものとなったのである。

一九〇〇年初頭の北ロシアと一九二〇年代の西ベリアという地域は、時代を越えて中世末から近世、そして革命後にあってもつねに辺境であったはずだろうが、この二つの辺境の地をオンチュコフは自ら、主体的に自分にとつての「辺境」としたのである。

彼が収集の対象として選んだもの、それは「かりに昔話と呼んでおくもの」であり、口承文芸学の中においては現代でも「異端」視されることのある民衆劇であった。さらには、過去の大事件や現代の風俗とその風刺を主題とした口承作品であり、分離派教徒の習俗であった。それが既製の「民俗学」のジャンル区分にあてはまりにくいことは容易に想像できるだろう。

オンチュコフが一九二〇年代に「郷土学」に関心を示していたことは、そうした彼の「異端児」ぶりと関わってくるはずである。一九〇八年におそらくは学界の真只中にあった彼が、突如として郷里の町サラールに戻り、故郷での啓蒙活動に専心したことは、現在までの段階ではその真相は不明であるにもかかわらず、重要であろう。おそらくは彼の中に一生の間つねにあり続けた「地方」Ⅱ「辺境」への志向がそうさせたのではないだろうか。彼が「方法としての」辺境を選び、つねに「辺境」にいななければならないと考え、事実そうあったことは、彼の経歴に今なお多く

の「謎」を生む原因となっている。

時として「時代」とかみ合うことのない彼の方法論的設定と問題意識が「辺境の学」としての民俗学を未完成であるにせよ成立させた時、それはそのまま今世紀前半の「精神史」となっていた。オンチュコフの仕事が今なお持ち続けているアクチュアリテイは、まさに彼のこうした精神としての「辺境性」にあると言える。

注

- (1) ロシア民謡に関する書誌として一九六二年に公刊された〔87〕にはオンチュコフの民謡に対する仕事六点があがっている。ただし一八九七年の個所に記された業績は存在せず、誤りである。
- (2) 一九六〇年代以前にも、オンチュコフ『北ロシア昔話集』への覚書として書かれた〔35〕のほか、〔34〕なども発表されている。ただし後者は『昔話集』をテキストとして使っただけの語法研究である。
- (3) ただし、モスクワ大学文学部口承文芸講座の調査史を概説した〔85〕には、オンチュコフについての言及は見られない。
- (4) ナレービンの論文は民族学研究所紀要「ロシア民族学・民俗学・人類学概史」シリーズに向けて執筆され、編集部に提出済みである。
- (5) サラーブルについてはブロックハウス・エフロン百科事典のほか、Н. Блинов, Сарыул. Исторический очерк. С., 1887を参照。
- (6) プリーシヴィンの生涯を概観したものとして例えば〔52〕でもオンチュコフとの関わりについて記されている。ただし四四ページで、シャーフマトフの採集成果として『北ロシアのブイリーナ集』があるとしているのは間違いである。彼は学生時代の一八八四年に北ロシアの調査・収集を行って一〇篇のブイリーナを集めたが、上記のような出版物とはなっていない〔44-46〕。
- (7) ここには、オズノビシンのアルヒーフにある二二九篇の民謡テキストの中から五〇篇が選ばれて発表されている。

(8) ゼレーニンの著作目録は〔73三—三三〕にあり、革命前に二一八点、革命後に八八点である。

(9) この点に関しては、昔話の著名な語り手別のアンソロジー〔77〕を参照。また、革命前からの伝統として昔話の伝承者「語り手の注目があつたことを指摘した石田英一郎の仕事〔93〕も参考になる。彼はオンチュコフの『昔話集』についても言及し、次の様に記している。「その大きな特徴は、昔話をその語り手別に分類したことで、各の伝承者に関する解説を之に附した。これは昔話の形成やその社会的機能に対し、これまでよりも一歩深くつき進んだ研究の途を拓いたもので、現在のソ連における新しい研究方法への先鞭をつけた試みともいえよう」〔93三四〕。

(10) この点の指摘は、レーニンの発言〔45〕にも見られるようにソ連の研究では伝統的に行われている。〔33〕のほか、〔43三三〕では、『北ロシア昔話集』が同時代のソコロフ兄弟の収集成果〔89〕とともに時代の基本的方向に反宗教的、反神秘的傾向を示している、とされる。

(11) 現在のソ連における北ロシアの散文的伝承研究の第一人者であるH・A・クリニチナヤはアンソロジー『北ロシアの伝説集』の中に、『北ロシア昔話集』の中から二篇を選んで収録している〔58第二七、一二八番〕。なお、『北ロシア昔話集』の中の数篇は日本語訳として読める〔101〕。

参考文献

- 1、H・E・オンチュコフ主要著作目録（書評などは省き、年代順に配列）
- 〔1〕 По Чердынскому уезду. ЖС, 1901, вып. 1.
- 〔2〕 О расколке в Низовой Печоре. ЖС, 1901, вып. 3-4.
- 〔3〕 Печорские былины. ИОРЯС, т. 7, 1902, кн. 3. (Отд. изд. СПб., 1902)
- 〔4〕 Былинная поэзия на Печоре. ЖС, 1902, вып. 1.
- 〔5〕 Новые былины из записей на Печоре. ИОРЯС, т. 8, 1903, кн. 3.
- 〔6〕 Печорские былины. СПб., 1904. (ЗИРГО по Отделению этнографии, т. XXX)

- [7] Заметка о рукописях у старообрядческих наставников. ИОРЯС, т. 9, 1904, кн. 1.
- [8] Старина и старообрядцы. ЖС, 1905, вып. 3-4.
- [9] Печорская старина. ИОРЯС, т. 10, 1905, кн. 3.
- [10] Печорские стихи и песни. ЖС, 1907, вып. 1, отд. 2; вып. 2, отд. 2; вып. 3, отд. 2; вып. 4, отд. 2. (Отд. изд. СПб., 1908)
- [11] Северные сказки. СПб., 1908. (ЗИРГО по Отделению этнографии, т. XXXIII)
- [12] <Бряжка>. ЖС, 1908, вып. 1, отд. 5.
- [13] Садбонная сказка во время смотрин. ЖС, 1908, вып. 2, отд. 5.
- [14] Народная драма на Севере. ИОРЯС, т. 14, 1909, кн. 4.
- [15] Северные народные драмы. СПб., 1911.
- [16] Стихи про Александра II. ЖС, 1916, вып. 4.
- [17] Поездка в Чердынский край летом 1923 года. Пермский краеведческий сборник, 1924, вып. 1.
- [18] Что и как записывать по народному творчеству. Краеведение, 1925, №. 3-4.
- [19] Библиография сказки на русском языке с 1917 года. В кн.: Сказочная комиссия в 1924-1925 гг. Л., 1926.
- [20] Сказки Тавдинского края. В кн.: Сказочная комиссия в 1926 г. Л., 1927.
- [21] По Тавдинскому краю (О работах по фольклору в 1929 г.). Уральское краеведение, 1927, вып. 1.
- [22] Три варианта песни о Кострюке. Сборник статей в честь А. И. Соболевского. Л., 1928.
- [23] Из уральского фольклора. В кн.: Сказочная комиссия в 1927 г. Л., 1928.
- [24] Масляница. Пермский краеведческий сборник, 1928, вып. 4.
- [25] П. А. Городцов. Сибирская живая старина, 1928, вып. 7.
- [26] Запрещенные песни о Константине и Анне. ИОРЯС, 1928, т. 2, кн. 1.

- [22] Сказки одной деревни. В кн.: С. Ф. Ольденбург, К пятидесятилетно общественной деятельности. Л., 1934.
- [23] Песни и легенды о декабристах. Звенья, V. М.-Л., 1935.
- 2' Н. Я. Контарь-Пондусов (井手豊)
- [24] Любова А. М. Новейшие записи былин. ЖМНП, 1905, No. 9.
- [25] Ольденбург С. Ф. О трудах Н. Е. Ончукова. Отчет ИРГО за 1908 г. СПб., 1909.
- [26] Богословский П. С. Из материалов по истории литературы и печати в Пермском крае. Пермский краеведческий сборник, 1926, вып. 2.
- [27] Ончуков Н. Е. Этнография, 1926, No. 1-2.
- [28] Ончуков Н. Е. Большая Советская Энциклопедия, т. 43. М., 1939.
- [29] Петрякина Н. С. Предложные конструкции в северновеликорусских сказках. (На материале сборника Н. Е. Ончукова «Северные сказки») Автореферат диссертации на соискание ученой степени кандидата филологических наук. М., 1952.
- [30] Чистов К. В. Заметки о сборнике Н. Е. Ончукова «Северные сказки». В кн.: Вопросы литературы и народного творчества. Петрозаводск, 1957.
- [31] Запозина Г. Заметки об Н. Е. Ончукове. Пензенская правда. 1958, No. 197.
- [32] Личные архивные фонды в государственных хранилищах СССР. Указатель, т. 2. М.-Л. 1963.
- [33] Чекрыжов Ю. Н. Н. Е. Ончуков (1872-1943). Из истории русской фольклористики. В кн.: Тезисы докладов на научной конференции молодых ученых МГУ. М., 1968.
- [34] Чистов К. В. Ончуков Н. Е. Краткая литературная энциклопедия, т. 5. М., 1968.

- [40] Иванова Т. Г. Н. Е. Онуков и судьба его научного наследия. РЛ, 1982. No. 4.
[41] Ее же, М. М. Пришвин и Н. Е. Онуков. РЛ, 1984, No. 1.

3' 参考文献

- [42] Абрамов И. «Царь Максимилиан». ИОРЯС, 1904, т. 9, кн. 3.
[43] Аздовский М. К. История русской фольклористики. Т. 2, М., 1963.
[44] Астахова А. М. Былины. Утоги и проблемы изучения. М.-Л. 1966.
[45] Бонч-Бруевич В. Д. В. И. Ленин об устном народном творчестве. В кн.: Изб. соч. в 3-х т. Т. 3, М., 1963.
[46] Вершинская А. А. Обновленческое течение в старообрядчестве начала XX века. В сб.: Актуальные проблемы изучения истории религии. Л., 1976.
[47] Виноградов Н. Н. Народная драма «Царь Максимилиан» и непокорный сын его Одолф». ИОРЯС, т.10,1905, кн. 2.
[48] Выходцев П. С. Народно-поэтические основы философской прозы М. М. Пришвина. РЛ, 1980, No. 1.
[49] Гольнец Г. В. и Гольнец С. В. Иван Яковлевич Билибин. М., 1972.
[50] Городцов П. А. Праздники и обряды крестьян Тюменского уезда. Ежегодник Тобольского музея 1915, вып. 26.
[51] Григорьев А. Д. Архангельские былины и исторические песни. Т. I, М., 1904; т. II, Прага, 1939; т. III, СПб., 1910.
[52] Ершов Г. А. Михаил Пришвин. М., 1973.
[53] Зеленин Д. К. Великорусские сказки Пермской губернии. Пг., 1914. (ЗНРО, т. 41).

- [4] Это же, Великорусские сказки Вятской губернии. Пр., 1915 (ЗРГО, т. 42).
- [5] Копылова Н. П. У золотых родников. Л., 1975.
- [6] Ес же, Уральский дневник. СЗ, 1979, №. 6; Сразу после войны. СЗ, 1980, №. 6.
- [7] Кошелев Я. Р. Русская фольклористика Сибири. Томск, 1962.
- [8] Криничная Н. А. Северные предания (Беломорско-Обонежский регион). Л., 1978.
- [9] Марков А. В. Беломорские былинны. М., 1901.
- [10] Народы Поволжья и Приуралья. М., 1985.
- [11] Новиков Н. В. О деятельности сказочной комиссии РГО. ТИЭ н. с., т. 104, Л., 1977.
- [12] Отчет ИРГО за 1900 год. СПб., 1901.
- [13] Отчет ИРГО за 1901 год, СПб., 1902.
- [14] Отчет ИРРО за 1904 год. СПб., 1905.
- [15] Отчет ИРГО за 1907 год. СПб., 1908.
- [16] Отчет ИРГО за 1908 год. СПб., 1909.
- [17] Отчет ИРГО за 1910 год, СПб., 1911.
- [18] Песни русских сектантов-мистиков. Сб. сост. Т. С. Рождественским и М. И. Успенским. СПб., 1912.
- [19] Песни, собранные писателями. Материалы из архива П. В. Киреевского. Литературное наследство, т. 79, 1968.
- [20] Померанцева Э. В. Судьбы русской сказки. М., 1965.
- [21] Ес же, Книга и сказочник. В кн.: Народная гравюра и фольклор в России XVII-XIX вв. М., 1976.
- [22] Пришвин М. М. Охота за счастьем. В соб. соч. в 8-ми т. Т. 3, М., 1983.
- [23] Проблемы славянской этнографии. Л., 1979.

- [74] Рерих Н. К. По пути из варяг в греки. В кн.: Избранное. М., 1979.
- [75] Россия, ее настоящее и прошлое. СПб., 1900.
- [76] Русские народные сатирические сказки. Новосибирск, 1981.
- [77] Русские сказочники. Сост. Э. В. Померанцевой. М., 1976.
- [78] Русский фольклор. Библиографический указатель. 1901-1916. Л., 1981.
- [79] Тот же, 1917-1944. Л., 1966.
- [80] Тот же, 1945-1959. Л., 1961.
- [81] Тот же, 1960-1965. Л., 1967.
- [82] Тот же, 1966-1975, ч. 1, Л., 1984; ч. 2, Л., 1985.
- [83] Савушкина Н. И. Записи народной драмы на Онеге. В сб.: Фольклор и этнография русского Севера. Л., 1973.
- [84] Её же, Русский народный театр. М., 1976.
- [85] Савушкина Н. И. и Кулагина А. В. Экспедиционная работа кафедры русского народного творчества. Вестник МГУ, серия филология, 1977, №. 5.
- [86] Савченко С. В. Русская народная сказка. Киев, 1914.
- [87] Сидельников В. М./сост. Русская народная песня. Библиографический указатель. М., 1962.
- [88] Смирнов А. М. Сборник великорусских сказок архива РГО, вып. 1-2. СПб., 1917. (ЗПРО т. 44).
- [89] Соколовы Е. М. и Ю. М. Сказки и песни Белозерского края. М., 1915.
- [90] Токарев С. А. История русской этнографии. М., 1966.
- [91] Ушаков Ю. С. Ансамбль в народном зодчестве русского Севера. Л., 1982.
- [92] Черепанова О. А. Мифологическая лексика русского Севера. Л., 1983.

〔93〕 石田英一郎「ロシアにおける民俗学の課題——昔話研究史を中心として」『石田英一郎全集2』筑摩書房、一九七〇年

〔94〕 加藤九祚「ヒマラヤに魅せられたひと ニコライ・レーリヒの生涯」人文書院、一九八二年

〔95〕 坂内徳明「ソ連民俗学の形成」『二橋論叢』八五—四、一九八一年

〔96〕 同「民族学資料収集家としてのE・A・リャーツキイ」『言語文化』二二、一九八四年

〔97〕 同「現代ソ連におけるロシア・フォークロア学の動向とその問題点」『一橋大学研究年報 社会学研究』二三、一九八五年

〔98〕 同「ニコライ・オンチュコフのフィールドノートより——二〇世紀初頭北ロシアの旧教徒」『なろうと』一一、一九八六年

〔99〕 保田孝一「ストルイビン改革・良心の自由・正教会」『ロシア史研究』三七、一九八三年

〔100〕 和田春樹「近代ロシア社会の発展構造——一八九〇年代のロシア(一)」『社会科学研究』一七—二、三、一九六五年

〔101〕 渡辺節子編訳『ロシア民衆の口承文芸』1「妖怪たちの世界」、2「聖者たちと奇跡」、3「伝説と世間説、上下」ワークショップ80 図書新聞、一九八一年

Список сокращения

ЖМНП	Журнал Министерства Народного Просвещения
ЖС	Живая старина
ЗРТО	Записки Императорского Географического Общества
ИОРЯС	Известия отделения русского языка и словесности Академии наук
РЛ	Русская литература
СЭ	Советская этнография

ТИЭ н.с. Труды Института этнографии. Новая серия

本稿は昭和六〇年度科学研究費補助金（一般研究（C）課題番号五八五一〇二二〇、研究代表者一橋大学社会学部教授中村喜和）による研究成果の一部である。